

マンガ大賞

Cartoon grand prize

2011 マンガ読みが選ぶ2010年の一推！



マンガ大賞2011決定！
選考員コメント掲載！

マンガ大賞
2011 マンガ読みが選ぶ2010年の一推！
選考員コメント掲載！

マンガ大賞2011 大賞受賞作品

ヤングアニマル / 白泉社

「3月のライオン」 羽海野チカ

選考員コメント・1次選考

- ドラマ云々ではなく、心理描写に惹かれてしまう。やはりうまい！作者自身が戦っているからこそ描けるもの。

Juvenile. 音楽家 / 児嶋 亮介

- 去年の「3月のライオン」は、読者の胃をもキリキリ痛ませるぐらいの宗谷名人と島田八段獅子王戦の最終局の激闘を描き切った後に、ハートフルな上にもハートフルな島田八段の帰郷エピソードをもって来るなど、緩急自在。それぞれのキャラクターの描写も進み、充実の一年だったのではないかと。

同人誌研究家 / 三崎 尚人

- かわいい女の子やカッコいい青年を描かせたらあんなにウマイのに、この上さらに、オッサンやジイサンまでこんなにうまいとは！作者のチャレンジ精神と向上心とその力量に脱帽します。棋士たちの熱いドラマに加え、ひなの受難に零の決意。目が離せない展開です。

朝日新聞記者 / 小原 篤

- どこまで切なくさせてくれるんだ！腹立たしいほどに引き込まれる！

信長書店四条河原町店・アルバイト / 中村 誠亨

- 人の痛みや癒しに心がぎゅうってなる。目が離せなくなる物語。

主婦 / 紺野 泉

- 登場人物全員が魅力的かつ切ない。ポエムを読んでもる時のようにジーンとくる漫画です。

PENICILLIN(vo) / HAKUEI

- 改めて推す必要はないかもしれない。だけどまだ届いてない人がいるならば、知らない人がいるならば。どうか手に取ってほしい。強く、優しく、けれど時に脆く。しかし確かにここには「人」が、生きている。頁をめくると、彼ら／彼女らの物語に触れられる嬉しさを、なんと言えば良いだろう！…巻を経るにつれ、将棋分より人間関係に重きが置かれてきたような気もしますが、そこはそれ。たぶんまだまだ続く物語、だから今こそ、読んでほしい！

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

- いつ来るか・・・いつ来るのかと思いながら読み勧めていましたがついに2010年発売単行本で回ってきました。ハチクロの時も感じていた羽海野チカの“毒”が…。キャラクターの可愛らしさやギャグの面白さ、時々おとづれる甘酸っぱい恋愛模様。こういったものにコーティングされているけども、私はいつも羽海野チカさんの作品から「何か一つのことを成し遂げるために、それよりもたくさんのものを犠牲にしなければいけない」ということの覚悟と葛藤を感じるのです。それはプロになりたいという気持ちでも恋愛でもおなじなのではないのかと。読んでいて、泣きそうな位つらくなることもある。だが、そこがいい！！彼女たちとの交流を深めていくうち、零は失っていたものを少しずつ取り戻していく…。と wiki には書いてあるけども、これからまた色々なものを失っていくんじゃないだろうか。林田先生と同じ立場なら「お前は、自分には将棋しかないと思っているかもしれないが、もっと可能性が広がっていると先生は思う。友達だって出来たじゃないか。先輩の棋士を试试看。今のお前が今以上に楽になることは決してないぞ。まだ若いから引き返すならまだ。それでもこの道にすすむのかい？」と聞かずにはいられない。これから単行本がでるたびに「読むんじゃなかった…」と思いながら買っていくんだろうな。

鳥取県 米子高校 美術部 & マンガ研究部顧問 / 佐川 由加理

-
- プロ棋士高校生が、丁寧な生活と棋士の戦いを通じて周囲との関係を築いていこうとする誠実な物語。大変な取材量がつめこまれていて、何を語りたいか、という本気が熱い台詞にありありと感じられるのに、人に語りかけてくるような親しみがどこまでもある暖かいマンガ。リアルタイムに結末がどうなるか知らないまま読めていて、本当に幸せです。

ニッポン放送アナウンサー／吉田 尚記

- 3巻！とにかく、(精神的に) 疾風怒濤の展開です。しかも、わ～、片膝ついてのプロポーズ(?)、久々に観た気がします。いまどき、少女まんがでも拝めません。久々に口から砂を吐きました。ザーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー。 (最大級の褒め言葉です) 身を削るような辛い勝負の合間、合間、ところどころに差し挟まれるフード描写もあいかわらずの冴えを魅せていて、辛い、甘い、辛いを交互に食べるがごとき快感で、これはもう読むことが、永遠に止まりません。絵がいいんですよね、これがまた。

料理研究家／福田 里香

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2011

選考員コメント・2 次選考

- かわいい女の子やカッコいい青年を描かせたらあんなにウマイのに、この上さらに、オッサンやジイサンまでこんなにうまいとは！作中の棋士たちとも重なり合う作者のチャレンジ精神と向上心とその力量に、脱帽です。棋士たちの熱いドラマに加え、ひなの受難に零の決意。今後の展開も目が離せません。

朝日新聞記者 / 小原 篤

- 自分の道を究めながら、心を溶かしていく様子に感動します。

会社経営者 / 小野 ゆうこ

- 一生の付き合いになる作品であると思う。

医師 / 岸本 倫太郎

- ノミネート作品の中ではボリューム感が上位だったのと、作画・作劇のクオリティの高さを評価しました。

ライター / 芝田 隆広

- このテーマで、それ自身に興味がない人をも読ませるストーリーはすごい。

メガマソ・ギター / 涼平

- 17歳でプロ棋士となった少年の物語。といっても将棋の話が分からなくても大丈夫。どちらかという、「才能」と「家族」の相反する悲しみと再生の物語、といったほうが良いかもしれません。少年がこれからどのように周囲の大人と係わり合いを持ち、助け、助けられて成長していくのか。そして周りの人々も何を取り戻していくのか。本当に将来(?)を早くみたいと思わせる作品です。

リアライズ・モバイル・コミュニケーションズ / 金子 幸恵

- ベストセラー作家だけに今更感もあるが、円熟に達した作劇はやはり評価されるべき。古風な題材に新たなアプローチを試みた点も好印象。

ライター / 福井 健太

- フィルムの1コマ1コマはイラストのように見えても、繋げれば大きなストーリーになる。同様にこの作品も、1話1話はエピソードの断片でも、それを繋ぎ合わせることで一つの世界が見えてくる。これは「主人公とそれを取り巻く人々の話」ではない。主人公の人生を軸にして、それぞれの人生を垣間見ているのだ。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 コミック担当 / 山本 さとみ

- 世界中のマンガ好きに自信を持ってオススメしたい!! 物語の根っこにある深く暗い部分と所々に入れ込まずにはいられないギャグとハーモニー加減が絶妙です。

株式会社ネビュラプロジェクト / 小森 和博

- 他人に寄り添われて人になる。これまで我が我がだった零くんがひなちゃんの心を救おうとするこれからが凄く楽しみ。投げやりだった棋譜がどう変わっていくのかとか。あんまり指してないけど(笑)

家事手伝い / 濱田 健太郎

- 一昨年の、まだ先の見えない状況でも、過去に数多ある天才棋士の物語とは一線を画し、キュートなキャラの奥に、棋士の孤独をのぞかせた作品として、この「3月のライオン」に強く惹かれた。そして今、その孤独さがなおいっそう浮かび上がった状況が示されながらも、そこから抜け出す道を、片寄せ合って生きる三姉妹、あるいは強引なライバルを絡ませ、示す展開に、この孤独が蔓延する世界で、生きていく希望を与えられる。三姉妹とて完璧に幸福ではなく、ライバルも体に不安をかかえ生きている。そんな欠けたところを持った人々が、つながりあい、補い合っている素晴らしさを、今一度噛みしめたいし、これからも心に刻んで行けたらと願う。

書評家 / タニグチリウイチ

- ようやくすこしずつ物語が見えてきたこの1年。登場人物は、それぞれにそれぞれの事情を抱えていることの輪郭が浮かび上がってきた。「ハチクロ」といい「3月のライオン」といい、羽海野チカが常に問いかける「生きていることの意味」。ますますこの先が楽しみな作品。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

- どれが大賞をとってもおかしくないと思えた13作品でしたが、いちばん、年齢性別を問わずにオススメしたいのがこの作品だと思いました。『ハチクロの羽海野さん』が『青年誌』で『将棋漫画』を描くと初めて耳にしたときの想像をはるかに超える衝撃に、ずっと襲われ続けています。登場人物の感情の密度が濃くて、この人たちは、この物語は、現実のものとなって目の前に現れてくるんじゃないかという錯覚を起こしそうになります。あかりさんにおいしいごはんをあたえてもらって、ふくふくになりたいです…！

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- 今更の有名作品かよ！という声が聞こえてくるような気がします。ではそうおっしゃっている方は、この漫画を読んでおられるのでしょうか…？なぜ今『3月の〜』を押すか。5巻まで来てようやくこの物語の語りたことこの輪郭が見え始めたからです。もしかしたら、こちらの勘違いかもしれませんが、今、『3月のライオン』を読み始めれば、間違いなく魂のどこかが何かに、反応するはず。だから、私は今、この作品をお勧めします。読むなら今です。奥深い勝負の世界に、一緒に参りましょう。

書店員 (啓文堂書店三鷹店) / 山川 美香

- 勝敗にこだわりつくせばバランスが悪くなる、大人としての、人間としての、あるいは男としての。普通の平和な世の中においては特に。そしてバランスが悪くなればなるほど、引きずり込まれそうなあぶない魅力が生じる。そうならざるを得ない運命を、狂気のようにどす黒いタチを抱えた棋士たちが織りなす世界、あえて言ってしまうと「傾奇者 (かぶきもの)」の世界を描くという点では、この「3月のライオン」はかなり重苦しい作品になる宿命を帯びている。実際、対局面面は息苦しいくらいの緊迫感がある。でも羽海野チカが描きたかったのはそんな重さだけではないはず。プロフェッショナルという言葉で語るには語感に少し違和感を感じるような、バランスを欠いて不安定な邪悪な魂を内に抱えた人間 (言い過ぎか)。そんな棋士だけが持つ磁力に、読者はどんどんはまっていく。それは案外「萌え」に通じる心理なのかもしれない。棋士萌え。和服だったりするし。そんな軽みが程よくブレンドされた作者独特のラブリーな世界観が提示される。ほっこり下町描写もあいかわらず冴えわたります。ともあれ普通の社会人から見れば十分にアウトサイダー的な棋士の世界、そこに巣くう何者かに取り憑かれたような男たちの世界を、ある種のおこがれを隠した視線で描けるのは、語弊もあるのだろうけれどひとえに作者が女性、つまり完全に外野だからだ。男には描けない男の世界。作中に登場する女性たちが1人を除き (いや除かないか) どこまでも優しく円く、温かいのは、何も青年誌連載だからということばかりではなく、そうしないと男が本編の幕切れまでもたない、という事情もあるからだ。主人公の桐山零だけでなく、作中登場する、男相手の勝負事に文字通り命を張るすべての男たちが。なんて劇的。マンガにするのにこれほど適した世界があったなんて。

日本経済新聞社 編集委員 / 天野 賢一

- とにかく、(精神的に) 疾風怒濤の展開です。しかも、わ～、片膝ついでのプロポーズ (?)、久々に観た気がします。いまどき、少女まんがでも拝めません。久々に口から砂を吐きました。ザー——————。(最大級の褒め言葉です) 身を削るような辛い勝負の合間、合間、ところどころに差し挟まれるフード描写もあいかわらずの冴えを魅せていて、辛い、甘い、辛いを交互に食べるがごとき快感で、これはもう読むことが、永遠に止まりません。絵がいいんですよね、これがまた。

お菓子研究家 / 福田 里香

- 切なくなったり、苦しくなったり、ほんのり幸せになったり…。読んでると心がぎゅっとつかまれてるような感覚になって、時々つらくなってしまうことも…。でも、零の成長していく姿、とりまく人たちそれぞれの思いを目をそらさずに見ていきたい。そんな作品です。

主婦 / 紺野 泉

- 最初の1, 2巻あたりは、青春お悩みマンガかと思っていたんだけど、これはおっさんが減法カッコいいマンガだ。特に4巻の島田さんのかっこよさは異常で、彼が故郷を思い出す回想のところで、李白の「静夜思」という漢詩に出てくる「頭を挙げて山月を望み／頭を低れて故郷を思う」という句が頭の中から離れなかった。

米子高校 司書 / 野間 勤

- 家族からの愛で育てられなかった（わけではないのか??）少年が温かい家庭と、友人や師匠と触れ合っていくうちに硬かった心がどんどんとけていくそんな状況を淡々と黙々と読み進めていくのが面白い。1人1人が丁寧に描かれてて将棋の名人の人生に関してもすごく丁寧に描かれていて大切に読み進めていきたい作品です。

アニメイト / 鈴木 寛子

- 綿密な取材に裏付けられた将棋の世界の非情な残酷さと下町の人情と光景の舞台装置の上であいからず登場してくる奴らが結局全部優しくてイヤツで悲しくて、なんというかそんな羽海野チカ作品が大好きです。

クリエイティブ・ディレクター・京都精華大学&神戸電子専門学校非常勤講師 / ひでつう・NORISHIROCKS

- 胸に突き刺さるマンガ。 巻を重ねるごとにとてもとても大事に丁寧に描かれているなと思う作品です。零君のいっぱいいっぱいの気持ちがマンガを飛び出て自分の中に入ってくる感じで読んでいます。

フリーカメラマン / 平沼 久奈

- ニャンコがかわいいこんな、推薦文は、起こられますね、愛らしさと、まるで、サナギから羽化する、過程かの、がくと、いっては、大げさですが、そこに、人の、悩み、闇、を、超えようと、する、さまの表現は、素晴らしいと、思います

tetote 代表 / 力丸 真

- 登場人物の一人一人が発する一言一言のセリフに、真剣勝負の重みがズシリときます。しかし、そればかりではなく、平凡な日常に救われるような温かさがありません。温かくて熱い一話一話を読むほどに引き込まれてしまいます。

教師 / 持丸 宏司

- このマンガは読者の心の深い場所で会話している。

Juvenile. 音楽家 / 児嶋 亮介

- 堂島孝平、というシンガーのうたに、「ショートカッター」といううたがあります。「一日で世界が変わることもあるのだから」という言葉を、ほんとうだ、とひとに思わせることができることには、どれほどの価値があるのでしょうか。4巻の島田八段の姿に、自分がばらばらになったときに、拾い集める方法があるのだと、そして拾い集めるときに、まわりのひとはきっとどこまでもやさしいと、知ること。5巻のヒナちゃんと零くんの姿に、まったく違う方向から、嵐のように救われる日が来ると信じられること。隅田川は、ひとはひとりでひとりじゃない、とおしえてくれるのです。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- じわじわテンションが上がっています。

コミティア実行委員会 / 中村 公彦

- 「まだこの物語と出会っていないあなたに、今、読んでほしい」。今年一番、そう強く思ったのは、この作品でした。立ち向かうこと。誰かを大切に思い、その思った気持ちを揺らがせないこと。誰かと共に時間を過ごし、それをいとしく思うこと。そういう、なんでもないかもしれないけれど、でもとても得難い感情が、ここにはちゃんと描かれています。だから、届いてほしい。この気持ちを、感情を、既に知っている人にもこれから知る人にも、読んでほしい。それは絶対に、これから生きるあなたの「力」になるから。読んで良かった。いま、ここに生きて、この作品を読める身で良かったと、思います。ありがとう。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

- 4巻での、島田の姿が非常に印象的でした。そこから、なぜか5巻の内容も濃く感じられます。4巻での島田の背景を知る事によって、感情移入の入り方が全然違ってきました。人間味や、キャラクターへの味方もぐっと変化のあった感じがしてとても、面白かったです。そして、心に突き刺さりしました。

フリーデザイナー / 平沼 寛史

- キャラクター全員が主役なんですよ。読んでいて世界にどっぷり浸れます。しかし5巻でのヒキはずるい。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

マンガ大賞2011 ノミネート作品

Fellows! / エンターブレイン

「乙嫁語り」 森 薫

選考員コメント・1次選考

- 19 世紀の中央アジア、またマニアックなところに照準を合わせてきたなーと思いつつ、読んでみるととても読みやすく、その世界に引き込まれる！！前作「エマ」より深化した描写の細かさとキャラクターのイキイキとした表情、彼らの日々生活している姿・・・このマンガを見ていると、彼らは本当に存在し、自分もこの作品の世界で生活しているような錯覚を覚えます。

フルハウス八戸ノ里店 店長 / 佐藤 誠

- 若い二人が幸せをつかんでいく様がとても微笑ましい。そして背景や風景や服装や人物が丁寧に描かれているのがいつも驚き、そして尊敬してしまう。画をみるだけでも満足してしまいますが、ストーリーもほれぼれします。二人の行く手に何か障害があったとしても、もう大丈夫。きっと二人で乗り越えて支えあっているんだろうなあ。としみじみ。今後の二人の生活を見守っていきたいですね。

三省堂書店海老名店・嘱託社員 / 近西 良昌

- 20 歳の花嫁アミルと 12 歳の花婿カルククのお話。部族間の結婚と諍（いさか）い、一族に伝えられた伝統、そして大国同士の争いの兆し。そうした中を健気に生きる人々の姿はなんだか懐かしくもあります。第一話の最初のコマから、描写の細かさに脱帽。その精緻な書き込みがこれでもかと続く一方、中央ユーラシアの雰囲気や事細かに伝える物語は、まさに森薫ワールド全開！「エマ」といい本作といい、趣味丸出しだからこそこだわり続ける作者のプロ根性は見習わなくてはなりません。

国分寺市議会議員 / 三葛 敦志

- 殺伐とした内容のものばかりを選んできたので、少しバランスを取ってしまったかもしれない。森薫の作風は「メイド」やら「俺の嫁」やら、萌え要素になりがちなモチーフだけ選ぶのにバックグラウンドが歴史上の史実や風習のものすごい重厚な資料をもって、現実的に納得いかないほどのシビアな出来事を選んで作品に取り入れていくので、甘さが少ない。ゆえに作られ与えられたキュンとした要素がないのに、逆に時折見せる、普通の幸せにキュンとしたりするとやられる。現代でピュアであるということは、危うさと物の知らなさにつながるのだけど、基本は歴史物なので知識のなさや、その時代の風習や慣習や歴史的にあった困難のまへの無知具合、出来ない具合がほんとにピュアなものを見せてくれているようにも思える。

アルナシステム 取締役 / 小林 智之

- マンガの粋を超えている！繊細な絵柄と雄大なストーリーと世界観はさすがです！とにかく読んでみて下さい！シルクロードの遊牧民と定住民の豊かな文化や生活は興味深い。そして強くて乙女な嫁と幼い夫が少しずつ夫婦らしくなっていく姿。これからの展開が非常に楽しみです！

有隣堂 / 徳永 あけみ

- 19 世紀の遊牧民のお話。遊牧民の生活や価値観がストーリーに上手く絡まって、作中のスミスのように知識欲を掻き立てられる作品です。またストーリーもそうですが、そこかしこに使われるモチーフやデザインが素敵です。3 巻からどういう展開になるか楽しみです。

音楽プロダクションマネージャー / 樋口 健

- キャラクター設定、緻密な書き込みの衣装に建物、素敵です。動物がたくさん登場しますが、野性味あり生き生きと描かれています。先が読めそうで読めない展開が楽しみ。年の差夫婦の細やかな心の動きにも期待。

DJ/DJ RANUMA

選考員コメント・2 次選考

- 私もこんなおよめさんがほしい…！！アミルとカルルク、20 歳と 12 歳の二人がとてもかわいらしくて、これからもっと素敵な夫婦になっていくのだろうなあと思います。私たちにはない文化や風習と、その中で生きている人々は、とてもあったかくて、私もそのあったかい世界におじゃましたような、一緒に過ごしたような気持ちになって、ほっこりしました。

金海堂隼人国分サティ店 副店長・コミック担当 / 園田 美智子

- 独特の雰囲気好き嫌いは分かれそうですが、私は好きです。絵を描くのが好きではないんだな、と思わせる無駄に緻密な細部（木彫りのお守りだとか、刺繍とか）も魅力のひとつ。読み飛ばすのではなく、ゆっくりじっくりマンガを楽しむには最適のタイトルだと思います。

リプロ池袋本店 コミック係 / 小池 由記

- 題材が、とにかく題材が面白い。昔の話なのに新鮮。背景がちゃんと調べられていて、それが説明的にならないように、でもしっかり描かれているから情景が描かれている絵以上に広がっていく感じがします。また、登場人物がとっても魅力的です。何よりこの作品、みんな「生きてるっ！」感じがします。

会社員 / 林 礼春

- 19 世紀の遊牧民のお話。遊牧民の生活や価値観がストーリーに上手く絡まって、作中のスミスのように知識欲を掻き立てられる作品です。またそこかしこに使われるモチーフやデザインが素敵です。女の子にも是非読んでいただきたい作品です。3 巻からどういう展開になるか楽しみです。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口 健

- 美しい絵と、激しくはないが、温かい愛情が丁寧に描かれていて、優しい気持ちになれる。

明文堂書店金沢野々市店 BOOK フロアー長 / 木村 俊介

- 情緒豊かでエキゾチックな少数民族の人々の暮らしに思いを馳せるとともに、愛らしくてチャームポイントたっぷりの登場人物達が織り成すドラマは、男性も女性もトリコになること間違いなし！

ひょうたん書店 西田本店 / 筒口 征洋

- 異国感満点の世界観に癒される。母性愛あふれる年上女性と健気な年下男子の組み合わせはやっぱりいいです。

漫画全巻ドットコム / 安藤 拓郎

- 精魂込めた丁寧な描写。最初だけかと思ったら、それがずっと続き、まるで絵巻物を見ているよう。押し寄せる時代の変化の波が続刊での気がかり。小さな幸せが大きな歴史に押し流されませんように。

国分寺市議会議員 / 三葛 敦志

- 全体のバランスと言う点では、今回のノミネート作品の中では一番だと思います。その実力はまだまだ底を見せません！しっかりと書きたいテーマの時代背景から生活など、とても良く勉強されているので根底である世界感がしっかりしているのもじっくりと読み込める理由の一つだと思います。ストーリーはとあるアジアの遊牧民・狩猟民族の男の子に嫁いで来た八歳年上のお嫁さんとの恋愛物です！それを取り巻く家族や親族達の思惑に翻弄されたりしながらも、しっかりと愛を育んで行く二人を見ていると微笑ましいやら羨ましいやらで、暖かい気持ちになれます。こんなお嫁さん欲しいです…

まんが王 八王子店 / 日吉 雄

- 世界観が素晴らしい。とても丁寧な作りで、作者の温かさがにじみ出ているような物語。ずっとこの世界に浸っていたい。

旭屋書店 船橋店 / 安田 奈緒美

- 今後の展開が気になるストーリーからも目が離せないが、とにかく描き込みが細かくて素晴らしいすぎて溜息がでます。

アマゾンジャパン株式会社 エディター／原田 圭

- 雄大なストーリーと世界観、繊細な絵柄が素晴らしい。これからの展開も楽しみです。

有隣堂 販売促進室／徳永 あけみ

- 細部にわたる丁寧な仕事で、作品に対する愛を感じます。他にも2巻になって次の展開が見え始めて、先が楽しみです。読んだ後の気分がすごくいい。忙しい日々の中で一瞬でもこのマンガに浸ることで癒されます。

フリー WEB デザイナー／河本 知香

- 「間」の書き方が好きなんです。そして、あの細かい所まで書き込むところが、前作に続いて、世界を広げているのが素晴らしい。

SHIBUYA TSUTAYA／実松 由夏

- 絵が、画面が作り出す「異世界」に、ぐいぐいと引きこまれます。作者が楽しくて描いていることがひしひし伝わってくるため、読んでいるこちらにも楽しいこと楽しいこと。そして嫁心に目覚めたアミルさんの今後にもなります。ダブルで楽しい作品です。

おたく史研究・腐男子／吉本 たいまつ

- このマンガに出会えたことが2010年最大の収穫と思えた作品。比較的なじみの薄い19世紀の中央アジアの生活をきちんと描いてくれています。しかしまあ、よくこれだけ書き込めるもんです。前作「エマ」のときもそうでしたが、描く対象への憧憬と愛情が全ページ、全コマからあふれていて、そこがキャラクターたちを生き活きと動かしている原因なのでしょう。彼らの生活をいつまでも見続けていたい、そう思わせてくれました。

フルハウス八戸ノ里店 店長／佐藤 誠

- 画力、素晴らしい！テーマ素晴らしい！まだまだなので、今後に期待大、大、大、大、大

tetote 代表／カ丸 真

- これぞ眼福、わが国の宝！

コミックナタリー編集長／唐木 元

- うまい！

大日本印刷／佐々木 愛

- ともかく丁寧に描きこまれた、その圧倒的な表現力。まさに漫画ならではの表現が素晴らしい！ 雄大な中央アジアの草原に生きる個性豊かな女性たちもとても魅力です。森薫先生の妄想が爆発した傑作だと思います。

COMIC ZIN コミックバイヤー／塚本 浩司

- 19世紀後半の中央アジア、シルクロードの遊牧民と定住民を描く。12歳の少年カルルクに嫁いだ8歳年上のアミルの物語。とにかくこの二人が可愛らしい。年は離れているもののお互い信頼し合っており、カルルクは12歳ながら落ち着きがあり賢い。まだ体は小さくても姉さん女房のアミルを体をはって守る姿は頼もしい。アミルは弓が達者で狩猟が得意。刺繍や料理もそつなくこなす。(刺繍は鳥や鷹、羊や馬等の勇ましい絵柄を好む) 草原を馬で駆け回る時の生き生きとした表情と、天然な可愛いらしさのバランスが絶妙。登場人物が魅力的な上に、遊牧民、定住民の暮らしも細かく描かれている。繊細な刺繍の模様や装飾品、躍動感ある動物の描写も必見。まるでそこに自分も生きているかのように引き込まれる。3巻ではまた新しい物語が紡がれるのが楽しみ。

啓文堂書店 府中店／山本 仁美

- 去年も、一次選考でかいたのですが、お嫁さんが可愛すぎる！！一巻以降キャラも増えましたが、それぞれが魅力的で、作品がより面白くなったと思います。刺繍で、家系を表したりと民族の特徴も色々できてきました。読むと自分も彼らの世界に入っていく空想をしてしまう作品です。

鳥取県 米子高校 美術部＆マンガ研究部顧問／佐川 由加理

マンガ大賞2011 ノミネート作品

ビッグコミックスピリッツ / 小学館

「アイアムアヒーロー」 花沢 健吾

選考員コメント・1次選考

- 噛まれるとゾンビ化してしまうウイルス。とうとう始まってしまった大規模感染。感染後にうわ言のように繰り返されるセリフや、追いかけてくる所作などから垣間見えてくる彼らの本来の人間性。下手なゾンビホラー映画よりよっぽど生々しく、恐ろしい。読んでいると焦燥感にかられてページをめくるスピードがどんどん上がっていきます。

フルハウス八戸ノ里店 店長 / 佐藤 誠

- とにかく黒いマンガ。

デザイナー / 佐藤 優

- おもしろくなるまでが長いところが余計に、その後をおもしろくさせる。

Grick (コンポーザー & アレンジャー) / 和教

- 昨年はじめの段階では、その過剰にグロテスクな映像美に感嘆しつつ、心から「好き」と言えなかったが、ヒロイン早狩比呂美が登場して俄然目が離せなくなった。特にここ最近の「鬱展開」には完全に打ちのめされ、毎号「スピリッツ」を持つ手が（怒りで）震えるほど。はっきり言って、比呂美をあんなにした作者が憎い！しかし、面白いのだから仕方がない！

中央公論新社 雑誌・書籍編集局次長 / 石田 汗太

- 日常が続いている。通常、この種のホラー・パニック物は、「漂流教室」や「エデンの檻」のように異世界に飛ばされたり、「ドラゴンヘッド」や「コッペリオン」のように一瞬で世界が核の炎に包まれたり、いきなり状況・世界が変貌して非日常になり、そこでのサバイバルのような展開になる作品が多い中で、この作品は日常の世界が続いています。それが実際身近に起こっている出来事のように、怖さを増幅しています。アメリカならともかく、日本でいきなり周りの人がおかしくなったからって銃をぶっ放してゾンビを殺しまくる一般の人々って、リアリティーがないですからね。まずはパニックになる・どうしたらよいのか調べる・とにかく避難するのが先のはず。緊張感もずっと持続したままで、さらに意外な展開や謎の人物登場など、とにかく先が楽しみです。

ジュンク堂書店新宿店 コミック担当 / 小磯 洋

- 花沢健吾は「ルサンチマン」からファンです。まず言いたいことは…花沢健吾の描く女の子は、精神的にエロかわいいです。さて本編ですが、グロの中にも「笑い」がある主人公のダメっぼさに苦笑しつつも、最後まで一気に読んでしまいます。花沢作品はどれも出だしが秀逸なので、最後までこの面白さを保つことができるのか？この辺も見物です。

リブロ 横浜相鉄ジョイナス店 / 伊藤 晃

- 花沢健吾が本気でゾンビ・パニック漫画を描いている、それだけでも読む価値がある。着地点が見えないまま、淡々と世界の崩壊とそこに立ち向かう冴えない青年を描く。安定して面白い。

ブロガー / サイトウマサトク

- 視点による恐怖感、スピード感の演出が素晴らしいです。

医師 / 岸本 倫太郎

- もうすっかり認知されていますが、やっぱり好きなので……。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

■ 昨年4位の本作は、連載1年分をさらに重ねてその内容、ますますエスカレート。卓越した観察力に裏打ちされたパニックの描写は細部まで破綻なく、どこまでも静かにひしひしと怖い。最新5巻は、情報社会ならではのペラペラした現実味のない怖さを執拗に描き出す。巨大掲示板サイトのカキコミとカットバックしながら刻一刻と加速する事態の悪化にただただハラハラ。その場に居合わせたら自分の死すら傍観者の的にしか体感できないんだきっと、というやるせなさ。ゲタを履かせられていたけれど、おれたち庶民の命なんて所詮はその程度の軽さだろ、と改めて気付かされてしまう読後感に、読み手は虚無に陥るはず。そして主人公に（読者にも）一縷の希望をもたらしただけの人間関係をも断ち切る非情の運命の抑えた描写には言葉もない。テレビゲーム的な設定の世界でコミュニケーションが通じず、とことん生理的嫌悪感をかもす相手とただただ対峙する「進撃の巨人」の戦士の絶望ももちろん読ませるが、それでも「いま・この」社会に起こりうると思わせる逃げ場のない恐怖と、忘れかけ薄れていた生存本能をむりやり鼓舞してそれに向き合う一般人の、アンチヒーローのかっこわるいヒーローぶりを描く本作の行方をこそ固唾をのんで見守りたい。

日本経済新聞社 編集委員 / 天野 賢一

■ 2巻以降の加速力がハンパない。

PENICILLIN(vo)/HAKUEI

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2011

選考員コメント・2 次選考

- 単なるサバイバルものの枠を超えたスケール。今後の展開の壮大さを予感させられる。

医師 / 岸本 倫太郎

- まだ、長く続くのかまとめにはいるのか、ありがちなようでこういう話の内容はあまりないんじゃないかと。
メガマソ・ギター / 涼平

- 四畳半的なまったりしたオープニングからのパンデミックゾンビホラーへの急変っぷりは漫画史に名を残す名作になる予感。先が見えな過ぎて怖い！

漫画全巻ドットコム / 安藤 拓郎

- もはや単行本を待ちきれず、この作品のために毎号「スピリッツ」を買っている。個人的に2010年のベストワン。いわゆるひとつの「リビングデッド」ものだけれど、「人間じゃないゾンビは皆殺し！」ではなく、主人公のヘタレ男が、人間と感染者の「境界線」にグズグズといるのが素晴らしい。そしてこの作品は「決してかなえられない愛」についての物語でもある。すべてが英雄の妄想であるという可能性も含めて…。5巻以後、また物語が大きく展開しており、最後に来るのは絶望か、希望か、どちらでもないのか、とにかくそれを見届けるまで死ねない！

中央公論新社 書籍編集局次長 / 石田 汗太

- 去年、読んだときは、正直「すごく面白いけど、巻数が進むと勢いがなくなりそう…」と思った。でも、今年の新刊を読んでも、すごく面白いので、喜んで投票します。

公務員 / 東 くるみ

- マンガ家漫画と思いきやフロムダスクティルドーンばりの展開の落差で一気に心を鷲掴み。その後作者のtwitter 見てさらにとんでもない落差を感じるのも一興。

ヴィレッジ・ヴァンガード本部 / 大山 敏樹

- 花沢健吾作品の序盤に魅せる展開は、今回も秀逸。あとは終盤に向けてちゃんと着地できるか？が見物です。今回の作品は、いつも以上に終盤の出来具合が全体の良し悪しを左右するかと思います。とりあえず5巻までは、かなり良いです！期待を込めて、1位に推薦します。

リプロ 横浜相鉄ジョイナス店店長 / 伊藤 晃

- 途中中だるみするところもあるのですが、ぐいぐい引き込まれてしまうストーリーはすごいです。

Grick (コンポーザー & アレンジャー) / 和教

- 2年連続で2次選考に残ったということで、連載が1年間進んだ分の蓄積やそれによる作品世界の深まりを考え、前回の4位を上回る評価はカタイと信じる一読者です。未読の方にとっては、ガッカリ感を懸念することなくグイグイ読め進められる“安心品質”であること請け合い。そんな充実ぶりを可能にしているのが、とにかくせっかちな読者に対するサービス精神のあまり、展開も作品的な消耗も早くなりがちな現在のマンガづくりとははっきり一線を画し、じっくり腰を据え、練りに練ったストーリーを送り出そうと努める作り手側の姿勢であることは間違いない。その良心に、読み手として感謝したいです。マンガとか小説とか映画とかの手段の違いは抜きにして、緻密で配慮が行き届いた描写と隅々まで構築された世界観を、じっくりと味わうときのあの至福の喜びが体感できます。怖いけど、この作品、ネットではいわゆる世紀末ものというか、終末的な状況を描いた既知の作品を引き合いに語られているようでもあります。たとえば「ドラゴンヘッド」が1990年代後半の(今にして思えば)まだまだうぶな世の中が、それゆえに抱いた「終わりへのおそれ」を結果的に援用したのに対し、何も起こらなかった世紀の変わり目を経由したゼロ年代の無熱、無音、無感のやるせなく醒めた空気の中でこのテーマを描いているところが本作のみぞ。読み手が久しく忘れかけていた肉体的な痛みを読みながら感じるができる。「あー、痛ってこんな感じだったよなあ」と。精神的な痛みについてもたぶん同じことが言える。乾いた画風がもたらす「BGMがつかない」感じ(と言うと元々が無音のマンガの説明としては変ですが)というか、効果音も劇伴もなく、絵の中の出来事は現実を映したようにリアルなのに、日常には普通に存在するざわめき、ノイズ、生活音だけが抜け落ちた無音空間で、淡々と展開する惨劇が怖さを倍増させる。練られたストーリーと演出力が「絵力」に裏打ちされて、このような作品ができあがるという実例だと思います。

日本経済新聞社 編集委員 / 天野 賢一

■ リアルなホラーの理想形。

ダ・ヴィンチ編集部／関口 靖彦

- 主人公を取り巻く日常をしっかりと描き、それを一気に破壊する、すさまじい展開。襲いかかるゾンビたちをどう怖く描くかがすごく考えられていて素晴らしい。しかし、本当に怖いのは、世界の変化をなかなか受け入れようとしない、人間の愚かさだったりするところもきっちりと描いている。序盤、崩壊へ至るまでに緻密に張り巡らされた伏線などもすごい。

書楽 阿佐ヶ谷店／石田 充

- 物語は「何が起きているのかわからない状況のまま」進んでいる。怖いけど目が離せなくなってしまう。もし、ほんとにこんなことが起こったら自分はすぐに噛みつかれちゃいそうだなあ…。英雄はこれからどこに向かうんだろう？怖いけど…気になってやっぱり読んでしまうでしょう。

主婦／紺野 泉

- 突然の世の中の変化に戸惑ったし、いきなり話が走り出してそれからずっとじわじわとしたハラハラ感。あのなかであれだけモラルを保っている英雄はすごいと思う。この先ひろみちゃんも助かる方向でおねがいします。

フリーカメラマン／平沼 久奈

- 2010 読んだ中で、一番ショッキングだった作品。てっきり、「ボーイズオンザラン」的なものを想像していたが、完全なゾンビ漫画で驚き。みるのもこわいのに、先が気になって仕方がない作品。

三省堂書店神保町本店 コミック担当／赤坂 真実

- ゾンビ・パニックマンガとしては、今のところ最高峰と思います。とくに五巻は、あまりにも切ない。どこにこの物語が落ち着くのかは全然見えない。なのに続きは気になる。

ブロガー／サイトウ マサトク

- 怖い、ひたすら怖いです。

コミティア実行委員会／中村 公彦

- これだけ巻数が進んでも、緊張感が途切れず、世界観が崩壊せず、リアリティを保ったまま続いている奇跡的な作品。素晴らしい。

ジュンク堂書店新宿店 コミック担当／小磯 洋

- 花沢先生の描く男性のは本当に気持ち悪い。情性にまみれた男性が、窮地で見せる潔さだからリアルとスリルをもって読めるんだと思う。人間の気持ち悪さ・頭に染みるような不快感を覚えながら一気に読んでしまうスリルある一作品。

原田まりる

- まだこれから！という所。中々、話の核の部分を見せない所がいやらしい。2ch といったソーシャルメディアを絡めて、今の情報化社会を映しだしたストーリーは、「もし、本当にこんなことがおきたら。。。」とついつい自分に身近な事として考えてしまう。今年一年は話が進展しそうで、非常に楽しみ。

DJ / DJ RANUMA

- こわすぎ。

PENICILLIN(vo) / HAKUEI

マンガ大賞2011 ノミネート作品

Elegance イブ / 秋田書店

「花のズボラ飯」 久住昌之 水沢悦子

選考員コメント・1次選考

- 単身赴任中の夫をもつ 30 歳のズボラな主婦・花さんがオヤジギャグ満載で食しまくる、もうひとつの「孤独のグルメ」。給料日前の食卓に常備しておきたい一冊です。

アンチパッシングセンター / 増山 寿史

- 背景のリアリティに息を飲み、数々のギャグに頬がゆるみ、手抜き料理にヨダレをたらす。現実に見ちゃうとたぶん眉をひそめるようなズボラ主婦の生活も、キュートな作画のおかげで微笑ましい笑いとなり、幅広くいろんな方に読んでもらえる作品になりました。

ひょうたん書店 西田本店 / 筒口 征洋

- 単身赴任のダンナさんがいる花さんのズボラな食生活。タマゴかけごはんにしぼづけ（勢いで 2 杯！）、夏のそうめん、3 日目のカレー、などなど、ほんとズボラすぎるんやけどわかる！ウマイよね！というごはんばかり出てきます。また花さんがほんとうまそうに食べるんだ…！おなかが空く 1 冊。

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- すばらしい笑顔とダジャレ！1人で盛り上がりすぎちゃうテンション！独り言と鼻歌の数々！そしてそして！すばらしくうまそうな手抜きごはんのメニューたるやもう花丸あげます！この漫画に！

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

- ひとりでもこんなに楽しく食べられるってことを実証してくれる漫画です。生きてること（食べること）を存分に楽しめる花ちゃんに共感する女性が多いのではないのでしょうか。そんでなぜかエロチックにも見えるのは気のせいかしら…。続編希望の一冊です。

アバンティブックセンター京都店 コミック担当 / 中村 真依子

- もし大賞になったら授賞式で水沢悦子先生に会えないかな……。

ライター / 会田 洋

選考員コメント・2 次選考

- 食べ物ネタというのは無限のバリエーションがあるのだから、と思わせてくれる一品。単身赴任の夫を待つキュートなズボラ妻の、ボケた独り言、しょうもないダジャレ、アラレもない格好、そして「んっ、んっ、ウンマ〜っ」という快感表現が絶品ソースとなって手抜きごはんを最高の逸品に。おナカがグーグー鳴ってたまりません。

朝日新聞記者 / 小原 篤

- ああ、わかります。という場面が多く共感しました。

会社経営者 / 小野 ゆうこ

- 絵を描いている人が好きなので。ただ個人的には久住昌之の食漫画であれば、1 月に出た「食の軍師」のほうが読みやすくいいかなあと思いました。花ズボは面白いけど詰め込みすぎな感もあるので、もうちょっと 1 話ごとのページ数があるといいかなあ……と思いました。

ライター / 芝田 隆広

- ゴリゴリと力押しのギャグに圧倒されますが、料理の数々に背景の作画や設定などを見ると、非常に緻密に組み立てられていることに驚きます。お手軽手抜き料理なのに、そんじょそらの料理漫画よりもおながすくのもすばらしくて困ってしまうほど！

ひょうたん書店 西田本店 / 筒口 征洋

- 愛くるしいの一言！

漫画全巻ドットコム / 安藤 拓郎

- 花さんがコーヒー牛乳を飲むシーンに思わず「テルマエ・ショック再び！」と叫んでしまいました。こーゆー作品は反則というか、10のうち3つ選ぶとして、コレを落とせる人はいるのか？と思ってしまう。いや、面白いです。「料理しない料理マンガ」という発想がもう批評的だし、既存のグルメマンガがあえて避けていた(?)最大のタブー「うまいものを食えばデブる」という事実を赤裸々に描写したのも特筆されます。生栗をもらった花さんがズボラで料理できず、代わりに「クリ」ームシチューを作る話がとくに好き。夫が単身赴任中の若妻、という設定も絶妙の味わいになっていて、一見こんなにユルいのに、実はものすごくテクニカルなマンガ。激ウマ！

中央公論新社 書籍編集局次長 / 石田 汗太

- 夫が単身赴任中。30 歳の主婦がやることと言えば…当然のこと手抜きでおいしいご飯です。あふれんばかりの説明的な独り言をバックに、次から次へとズボラなご飯が登場。でも、魅力的なんですよー！しかし、食べる顔がエロい。なお、「たまん坂」(P.11) は国分寺市です。

国分寺市議会議員 / 三葛 敦志

- こういったルポっぽいものが大賞を取った記憶があまり無いので、折角ノミネートされているのですから推して行きたい所です。今回読んだ中でも一番美味しそうな作品でした！主人公である単身赴任の旦那さまとは離れ離れな花さんですが、寂しいながらも結構悠々自適に生きています。そしてなにより全編ご飯を食べるシーンがもちろんあるのですが、全部が美味しそうに食べているので、お腹が減っている時に見るのはとっても危険な一冊です。基本的には簡単に家庭で作れて、材料も簡単に揃えられるものばかりですので、作る事も出来ますし毎話の扉絵にレシピが載ってます(分量は無し)ので、それを参考にするのも面白いですね。御馳走さまでした。

まんが王 八王子店 / 日吉 雄

- 単身赴任のダンナさんがいる花さんのズボラな生活。タマゴかけごはんにしぼづけ(勢いで 2 杯!)、夏のそうめん、3 日目のカレー、などなど、ほんとてきとうすぎるんやけど、すごいわかる…ウマイよね!というごはんばかり出てきます。またほんとうまそうに食べるんだこのひと…!タイトルに付いてるとおり、主人公がズボラな生活してるマンガなのでごはんが手抜きでも、洗濯ものがたまってても、全然掃除してなくてもまあ大丈夫だよな、始終きれいにしてるなんてないよね、みんなそうだよね何か安心!というかホッとするというか、そんな読後ですばらしいなあと思います。

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- 出てくるご飯がおいしそう！ご飯を食べてる花の顔が幸せそう！花の激しいひとりごとにつられて食べたくなる！このマンガには、どこを切り取っても幸せしか詰まってないなぁと感じました。

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- まさかロリコミック作家と「孤独のグルメ」の久住昌之が組み合わさると、こんな面白い作品が出来上がるとは…。

リプロ 横浜相鉄ジョイナス店店長 / 伊藤 晃

- 花ちゃんの食べっぷり、こっちまで幸せな気持ちになります！ズボラなレシピや暮らしっぷり、いろんな、楽しみ方が出来る漫画です。ただのグルメ漫画ではありません。

有隣堂 販売促進室 / 徳永 あけみ

- 年の暮れの頃にこういうパケモノが。続巻も出るようですし、タイミングよく受賞なるか期待大。

往来堂書店 コミック担当 / 三木 雄太

- 僕の枕元には、「おいピータン」や「酒のほそ道」などもし、実在したら絶対に仲良くなって一緒に飲みに行ったり、ごはんを食べたりしに行きたい！、そう思うってしまうキャラクターが登場するマンガが置いてあります。そんな枕元にグイグイとドヤ顔で入ってきた新参者、それがこの「花のズボラ飯」ッ！すばらしい笑顔とダジャレの連続！1人で盛り上がって独り言と鼻歌！そしてうまそうなズボラ飯！ダンナさんも愛してるし！素敵な奥様！部屋汚いけど！愛すべきマンガ！愛すべき花ちゃん！間違いなく今後も枕元に居座ることになるかと思います。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

- 自分が【料理した！】と思っていたものが実は【ズボラ飯】だった驚愕！！久住先生の書く、グルメ本(?)は、全く高貴でもなく直接、胃袋や食欲やよだれに訴えられてくる。今回なんて、一話・一話毎おなが鳴る話しばっかり。白いご飯を早く炊けるようになりたい。

アニメイト / 鈴木 寛子

- グルメ漫画業界の最終兵器彼女。そこらでやつけたズボラなメニューの数々がなんでこんなにうまそうなのかあああああああ！そしてああ。花ちゃん。カワイイよ。カワイイよ。つか。「ゴローさん」で…あの孤独のグルメの…なのか？ああ。花ちゃん。カワイイよ。カワイイよ。

クリエイティブ・ディレクター・京都精華大学&神戸電子専門学校非常勤講師 / ひでつう・NORISHIROCKS

- 毎回毎回、いい食べっぷりです。「今ならあたしブタと呼ばれてもいい」と言っつつ食べているのが何の変哲もない卵かけごはん。いや、確かに美味しいですけどね。ズボラな自分をふりかえりつつ、食べるのがもっと好きになるマンガでした。

教師 / 持丸宏司

- この二人の才能をあわせた編集者のセンスに脱帽！水沢先生の丁寧な描写力に感嘆しました！でも一番ウケたのは「移民の歌」が鳴る目覚ましですw

COMIC ZIN コミックバイヤー / 塚本 浩司

- 絵柄で読む人を選んでしまうかもしれないけれど、花ちゃんのキャラクターや行動は女性にとってどこか身に覚えがあるかもしれない。(見られたくない裏側?) 花ちゃんの作るズボラ飯は家にありそうな材料なので、あんなに美味しそうなら一度試してみたい。『孤独のグルメ』との併読をおすすめします。

啓文堂書店 府中店 / 山本 仁美

- もしマンガの神様がいて1つだけ願いが叶うなら、「花のズボラ飯」の続きを読ませて下さいと僕は言いたい・・・なんて回りくどい言い方ではなく率直に続きが読みたいのですっ！！僕の知っている女性にこのマンガの主人公「花」のモデルじゃないか！？と疑いたくなる程そっくりなヒトがいます。みなさんの周りにもいるであろう、美味しく食べることに貪欲で憎めないあのヒトを想像しながら読んでみましょう。「あ〜分かる、分かる！」と共感しながらツボに入りすぎ、満腹感を通り越しおかわりがしたくなります！

元レコード店 コミック担当 / 阿部 大介

-
- 過剰に前向きな食欲って、すてき。「ああ、お腹空いてもいいんだあ〜。食べたいって、こんなに思ってたんだあ〜」と、よだれが出てきます。とにかく、食べたくなる。個人的には『孤独のグルメ』の渋さも捨て難いのですが、何度も読んでたら、こちらの過剰さもだんだんクセになってきました。ちなみに、食べものを某か用意してから読むことを推奨します。ほんと、よだれの対処に困るから！

ジュンク堂書店 池袋本店 / 田中 香織

- 食べているものは、料理番組のはしにもぼうにもかからないようなものばかりなのに、くやしいけどお腹がすいちゃう。いちいち、エロ美味しそうな顔とリアクションが可愛くて、部屋がきたないのもズボラなのも許せるラブリーな奥さんが大好きです。

鳥取県 米子高校 美術部 & マンガ研究部顧問 / 佐川 由加理

- “人に薦めたい”というマンガ大賞のコンセプトを考えた時にこれが一番合っているのでは無いかと思いました。花さんの美味しそうな笑顔は色んな人に知って欲しいです。

ブックファースト 新宿店 / 渋谷 孝

- 人間の第一欲求・食・睡眠・性。セクシーなのが美味しそう。眠いのにもムラムラする。そして・・・美味しいのがなんかエロい！これってありじゃない？女は抜けているくらいが色気があるのを体言したマンガです「エロうま」な表情にご注目。

原田まりる

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2011

マンガ大賞2011 ノミネート作品

月刊 flowers/ 小学館

「失恋ショコラティエ」 水城せとな

選考員コメント・1次選考

- 恋愛とはエゴであるという、誰もが気が付いていてそれでも描けないテーマを堂々描いてるすごさ。「今、最も男性が読むべき女性マンガ」。

サブカル研究 / 荒川 澄

- やっぱり少女漫画は片思いでできている！（？）登場人物、全員片思い。その思いがうまくいかず、それぞれが悩み、駆け引きをする姿が良い。そして綺麗すぎる純愛じゃないところがいい。男の子が主人公で、こんなに入り込める少女漫画はなかなかないんじゃないかしら。主人公のショコラティエ、爽太が思いをよせる人妻サエコの、モテテクは弟子入りしたくなるほど。

バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- 昨年、この賞の1次推薦コメントに興味を引かれて読んでみたら、まさに私好み。恋愛の甘さと不条理と残酷を余すところなく描いた「ドMマンガ」の傑作。「俺に惚れたら低温火傷するよ?」「何それ」「いろいろとヌルイ男だから 俺」等々、セリフ回しのうまさに惚れ惚れする。腹黒サエコさんも3巻でいよいよいい味出してます。恋愛ドMマンガとしては『うそつきパラドクス』（これも傑作!）と双壁ですが、より間口が広いと思われる本作を推します。落ち込んだ時に読むと元気が出るのが不思議？

中央公論新社 雑誌・書籍編集局次長 / 石田 汗太

- 緻密に書きこまれたチョコレート。それと同様に緻密に書きこまれた登場人物たちの心理描写。主人公以外の恋愛模様も展開が進み、今後さらに面白くなる予感。

会社員 / 齋藤 隼

- 主人公の爽太が恋焦がれるサエコのヴィジュアルがあまりかわいくない上に、パリにチョコの修行に出て5年後に凱旋帰国するって1話でなんかお腹いっぱいになって、読むのを止めようとしたけど、薫子がカワイイので読み続けられた。それが1巻への率直な感想だが、その後はどどんはのめり込んで、おそらく2010年で一番読み返した作品だろう。特に薫子の「肌寒かったら厚着するでしょ!？」この子バカなの!？」ってところがすごい好きだ。髪おろしてもいい感じっすよ。段々シリアスな展開になってきて、3巻の最後の方では、みんな元気なくなってきたなあ。これからどうなるんだろう。

米子高校 司書 / 野間 勤

- 少女マンガのようできて、時に現実を思いしらされるような台詞や展開にドキリとさせられる事も。

啓文堂書店 府中店 / 山本 仁美

- だるだるな恋模様にどっぷりつかりながら、チョコレート食べたい!てなるおいしいマンガです。

主婦 / 紺野 泉

- もう、好きすぎるとしか言いようがない。人間、恋愛が絡むと本当に自分のことしか考えられなくなる。その心の醜さと純粋さがうまーく描かれている。チョコレートがおいしそうなのも魅力的。

三省堂書店 神保町本店 / 赤坂 真実

- スイーツといふかなんといふか。

ライター / 会田 洋

選考員コメント・2次選考

- 表紙の絵柄やあらすじを読んだだけの段階では「あー、なんかこう『アンティーク』+『ハチクロ』みたいな感じ？ はいはい」ってな感じだったのですが、いやはやこれは凄い。甘い甘いチョコレートの裏に潜む、思いのほかドス黒くてピリリと辛い片想い。クセになる。ドラマ化されるんだろうなあ。そのうち。

アンチパッシングセンター / 増山 寿史

- 悪い（魅力的な）男はこうやってできるんですね。ストレートな感情表現しかできなかった主人公が、恋の駆け引きで成長してゆく話。まっすぐに成長する話もいいけど、現実にはこういう風な成長をする必要がある場合も多々あると思います。ダークに成長してゆく人間の話ってのはあまりなくて新鮮だし、納得性が高いです。

IT系企業 / 廣瀬 公将

- 今年は激戦で、いろいろ迷いますが、DMを自任する私としては、やはりこれを落とすわけにはいかない。恋愛とはとてつもない愚行だけれど、だからこそ生きる糧になるということ、これほど力強く前向きに(?)描いた作品を知りません。LOVEとはSMと覚えたり。これを読むと何やら元気が出る私は、ヘンタイでしょうか？

中央公論新社 書籍編集局次長 / 石田 汗太

- だいたい、少女マンガの恋愛モノだったら、この恋がうまくいくように期待しながら、ドキドキして読むのだが、なぜかこの作品はそうじゃない。うまくいかないのが面白い。登場人物、全員片想い。その想いがうまくいかず、それぞれが悩み、駆け引きをする姿が良い。そして綺麗すぎる純愛じゃないところがいい。男の子が主人公で、こんなに入り込める少女漫画はなかなかないんじゃないかしら。しかし主人公のショコラティエ、爽太が想いをよせる人妻サエコの、モテテクは弟子入りしたくなるほど。

バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- 恋する女性を振り向かせるため、ショコラティエになった男子が主人公。登場人物全員片想いで、手練手管を使ってよく思われようとして。ショコラティエとして店を営む主人公たちが、時おり見せる「プロ」の顔やセリフもいい！甘いだけでなく、複雑で深いショコラのような味わいがあるマンガです。つづきが気になる…！

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- 恋愛をテーマにしたマンガの魅力は「幸せ」とか「切なさ」に重きをおかれることが多いと思いますが、このマンガを読んでいて感じるのとは、とにかく胸をえぐられるような「痛み」。ここまで男と女のズルさやしたたかさを描いてるのに嫌な気持ちにならずにのめりこんでしまうのは、恋をしている人ならどこか共感できる部分が多いからだと思います。あとはもう、水城さんのチョコレートへの愛が尋常じゃありません！物語を甘く彩り、そしてほろ苦く、時にはドロドロにするチョコレートの描写の魅力的なことといったら。今一番続きが気になる恋愛マンガです。

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- ああ、そうそう、あるある、な感じが心地よい。続きが読みたい。

IT系企業経営・元漫研編集長 / 平田 淳

- 登場人物がみな善人に描かれていない点が高評価です。

アマゾンジャパン株式会社 エディター / 原田 圭

- 次第に黒くなっていく爽太の姿にドキドキ、ワクワク。これもまた人間の「成長」なわけで、一筋縄でいかない人間の姿を、見事に描き出していると思います。

おたく史研究・腐男子 / 吉本 たいまつ

- おいしいチョコレートが食べたくなる！でも、チョコレートのように甘くない恋愛模様は大人味です。もっと、悪い男になって？ 爽太くん。

主婦 / 紺野 泉

- 万人に薦められるかと言うと少し違うかもしれませんが、読んでいて、とっても面白かったですし、たくさんの男の人にもぜひ読んで欲しいなと思っていました。少女漫画が厳しい韓国でも発売されれば、きっとヒットするよな気がします！美味しいチョコレートとドキドキする恋愛、両方欲しいですね！

COMICCOZZLE（韓国）店長 / 野田 真人

- 小悪魔 (!?) サエコさんが、マンガ外の男性読者にまで駆け引きをしにかけてくるのが驚異的。カレンダーに「デート (ハートマーク)」って入れる時、これが本心なのかそれとも「見せ」としての行為なのか、読んでいる身のはずなのに主人公と同じように駆け引きに躍らされている気分。

往来堂書店 コミック担当 / 三木 雄太

- やっぱり何度読んでも薫子さんが魅力的。2010 年の大収穫。3 巻の感じだと、これから暗い内容になってくるんだろうか？ それはそれでまた好物なのでやっぱり目が離せないマンガだ。

米子高校 司書 / 野間 勤

- このマンガを読んだのはノミネート作品で一番最後。ノミネートされてなかったら読んでなかったでしょう。帯の文章も「僕をとろけさせるのは君だけ」なんて書いてあって、なんてキザったらしいマンガじゃ！と思っていました。これを読むまで 2 位に選んだ作品が 1 位でした。揺らぐことはないな。そう思っていました。と、思ったのに…読んだら 1 位はこの失恋ショコラティエになってしまいました…！おもしろい！この色オトコが出てくるオシャレなマンガ！ちょっと現実にいたら気持ち悪い色男が、おいしいチョコを作る！それがこんなに面白いだなんて！奥さん、ご存知でしたか！？と隣の家におススメに行きたいくらいおもしろかったです。悲しいかな、1 年に 1 巻の刊行ペース。恋愛物で 1 年はツライ！でも待つ！待つ価値がこのマンガにはありますよ！

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

- ソータ最高！片思いものは少女漫画の定番スタイルですが、これは大人も楽しめます。好きという気持ち、一途さ、、、ただその先にある葛藤、キレイなだけじゃない感情もしっかり描いていて、必ず誰かに共感できるはず。キャラクター設定から吹き出し外の台詞も完成度高いです。自称“キモメン”、でもきちんとして付き合ったら間違いなくいい男、爽太のような男性！日本にどれ位いるんでしょう。出会えるものなら、爽太の様な方に出会いたいわ！乙女心くすぐられます。

フジテレビアナウンサー / 松尾 翠

- とろけるような、愚かしい恋の味。すかして、いなして、嘘ついて。リベンジを糧にめきめき成長するソータの煩悶から目が離せません。

コミックナタリー編集長 / 唐木 元

- 失恋とショコラティエのマリアージュや！ といっておけばこれはいいと思います。ギャグと妄想とシリアスのバランス、緩急の付け具合、イケメンキャラの配置の妙、どれもすばらしい。薫子さんが最萌です。すばらしい。

ブロガー / サイトウ マサトク

- 男目線の少女マンガ。それが新鮮！少女マンガ嫌いの自分が初めてハマりましたー。

凸版印刷株式会社・ディレクター / 紺野 慎一

- この「黒さ」が堪らない。

コミティア実行委員会 / 中村 公彦

- 恋とはなんと厄介で、どうしようもないものでありましょう。みっともなく、止めようがなく、しかし人を確かにいずこかへ進ませるだけの、大きな力ともなる、それ。勧めて良いかわかりませんが、でも、私は好きです。読むたびに、唸るけど！困るけど！…でも、嘘がないんです。だからこそ、心がぎゅゅとする。たまには、いいんじゃないですか。いかがでしょう？

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

マンガ大賞2011 ノミネート作品

月刊コミックビーム / エンターブレイン

「さよならもいわずに」 上野 顕 太郎

選考員コメント・1次選考

- 過剰にも思える比喩表現や映画のような終わり方などわざとらしく映るかもしれませんが、しかし、これが「最愛の人を亡くした作者にとっての真実なのだ」と思うと、心臓を掴まれたような感覚にとらわれ、息もできないような切ない感覚が押し寄せてきます。時間の経過と共に事実を受け入れ、未来へ進んでいこうとする作者の心の動きは非常に丁寧に描かれ、読んでいる僕達に突き刺さります。

フルハウス八戸ノ里店 店長 / 佐藤 誠

- 読んで「せつない」という意味の深さ、「心にポッカリ穴が空いた」という表現の的確さを感じました。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

- 愛する妻を亡くしたひとりの漫画家の、深い悲しみが文学的な力と美しさを伴って生まれた希少な作品。作者の内面がそのまま漫画になったような、生々しくて危なっかしくて芸術的な表現の結晶は、読む者の心すらえぐるほど。

ひょうたん書店 西田本店 / 筒口 征洋

- 泣きました。愛する人を失くした時の言葉にならない程の喪失感、絶望感、悲壮感。心理描写が本当に上手くて、読んでいて胸が痛んだ。細かい所まで描かれていたので凄くリアルだった。漫画はたしかに客観性も大切かもしれないけれど、この作品に関しては逆に客観性がなくて良かったと思う。哀しくて何度も読むのは辛いけれど、一度は読んでみて欲しい漫画。

シンガー / 山野井 千佳

- すごい、と圧倒されます。通常、身近の亡くなった人を題材とする作品は、故人の病気とかに負けない、けなげな姿が中心に描かれ、美しく磨き上げられた思い出として語られるものばかりです。しかしこの作品は、作者がいかに悲しんだかという主観が中心で描かれ、故人の生前のエピソードも、楽しいばかりでない日常の出来事が生々しく描かれ、作者の全てを曝け出しています。それなのに、作品として冷静に全体を構成する視点も貫かれてもいます。すごい、作品です。

ジュンク堂書店新宿店 コミック担当 / 小磯 洋

- 衝撃的すぎた。「心を刺す」という表現があるが、この作品は「心をえぐる」という表現の方が合っている。圧倒的。

Juvenile. 音楽家 / 児嶋 亮介

- 妻のキホが若死した様子を描くという暗い内容だが、それだけに目を離せなくて一気に読んだ。「独りの時はいつも階段を使っていたが／キホと一緒にいる時はスロープを使っていた／それをなぞってスロープを行く／この日から階段は使わなくなった」という部分とか、そういうこまごましたのがイチイチ心に刺さる。

米子高校 司書 / 野間 勤

- 妻を突然失った悲しみ、喪失感は、描きようもないはずと思われるのに、それでも描いてしまう漫画家の「業」に、深く心を動かされます。そしてそれを通じて、妻の死に折り合いをつけていく姿が、二重に心を打ちます。

おたく史研究・腐男子 / 吉本たいまつ

- これは本当に胸に突き刺さりました。命が有限である以上、大切な人は必ずいなくなる……という当たり前にしてものすごく残酷な事実。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

-
- 今年一番心が震えた漫画。感動した、泣いた…なんて簡単な表現はしたくない。唯一無二の大切な妻を亡くしたウエケン。その苦痛はわたしには想像もできない。(そもそも未婚だし。)漫画家という職業ゆえに、それを作品するという選択をしたウエケン。苦悩が作品からも伝わってくる。しかし、妻がたしかに生きていた証拠を残すため、見事描き上げた。(のだとおもう。)その作品が、人の心を動かさないわけがない。万人に薦める本かといわれたら疑問だが、自分の大事な人にはぜひ読んでほしい。

三省堂書店 神保町本店 / 赤坂 真実

- 正直、万人に読ませたい!という物語ではないし、解り易い笑いや面白さがあるわけではない。でも、この、ひたひたと迫る感情を、なんと言えは良いのだろう。まだ「誰か」を喪ったことのない私にさえ感じさせる、静かな、しかし強い強い悲しみとさみしさを。…だから、読めるなら、読んでほしい。小説や映画と同じように(と言っては語弊があるかもしれないが)、間が、語ってくるのです。コマの間から、声が聞こえる。声でない、だけど確かな、「彼」の声が。

ジュンク堂書店 池袋本店 / 田中 香織

- ギャグ漫画家としても異能の作者が、妻との死別を描いた作品。2カ所ほど、衝撃で手が止まるほどのシーンがありました。この絵についている言葉はほんの数文字。でも絵だけでも文字だけでもこんなに「伝わる」ことはなかったでしょう。絵+言葉で描くことによってどれだけ伝わるが増すんだろう、とマンガの凄まじさを体験しました。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2011

選考員コメント・2次選考

- 血を吐くようなセリフが胸に突き刺さる。めまいがするように画面の奥に引き込まれる。長い時間を一緒に過ごしてきた連れ合いを持つ身には、ずっしりと重い手応えというか、「きずあと」を残すような体験を与えてくれる本です。

朝日新聞記者 / 小原 篤

- こんなに切なくなるなら読まなきゃよかったと思えるくらい、心に迫ってくる漫画でした。嘘偽りのない表現、目線、間が心を締め付けてきます。泣きたい人にお勧めな漫画です。

デザイナー / 佐藤ユウ

- これは、ずるいので、一次選考の時に、外しておきました。突然、ぼっくりいかれた経験を持つ人間には、とても、なんとゆうか、めんどくさい漫画です。（気持ち的に。）この漫画を読んでいる自分を、斜め上からながめている自分があります、この漫画を読んで、感情の確認作業の様な気分になり、涙を流している、気持ちの悪い自分を、ゲロ吐きながら、見つめているようです。ああ、気持ちが悪い。ぼくとつとした絵柄、喪失感の描写、何とも言えん台詞まわし、めんどくさいです。（自分の気持ちが。）これは、漫画であって、漫画ではないような気がします。これ以外、選びたくありません。なので、選びません。

ミドリ / 後藤 まりこ

- マンガでここまで人の感情を表現できるのか！

公務員 / 東 くるみ

- 愛する人を失った悲しみとそれをネタにしてしまう「漫画家としての業」があやういバランスを保っている。結果として誤解を恐れずに言うならとても良質な「エンターテインメント作品」として成立している。

ヴィレッジ・ヴァンガード本部 / 大山 敏樹

- すばらしい、「まんが的表現」の数々。作家の業って壮絶だ。読後感は、まんがや小説ではなく、アラキーの愛妻ヨーコシリーズを思い起こさせます。本作を選んだのは、たぶん、自分の年齢的なものもあるでしょう。それと、1巻ものなので、来年はない、ということから。

お菓子研究家 / 福田 里香

- 一生忘れられないマンガ。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

- 実際に愛する人を失ってしまった者の心情を、他人が理解することなど、不可能なのかもしれない。だけでも漫画家として、様々な表現のテクニックを駆使してその心情を他人に伝えようとする熱がこのマンガにはある。

書楽 阿佐ヶ谷店 / 石田 充

- 「最愛の人を亡くした男の、真実の物語」という手垢のついた表現では言い表せない、上野顕太郎、入魂の作品。漫画家だけでなく「表現者」の方は誰しも全作品に心血を注いでいると思います。それでも、ひしひし伝わってくるこの作品に対する姿勢や覚悟のようなものは、他と異次元であると感じました。また、作者の喪失感を追体験させてくれるような数々の表現。マンガでしかできないすばらしい表現力です。経験した本人以外は到底書けない唯一無二の作品です。

フルハウス八戸ノ里店 店長 / 佐藤 誠

- 号泣でした。止まりません。上野先生が、きっとかなり心を使って生み出して下さった作品。ありがとうございます。生活とそれを作ってくれる人を大切にしたいと思わせてくれました。

フジテレビアナウンサー / 松尾 翠

- かけがえのない大好きな人がかけてしまうなんて今はまだ気持ちを想像する事しか出来ないのも実感は出来ない。マンガを通してそれが少し伝わってきて、本当の悲しさには到底届かないけど、どうしよう、とも思ったし、悲しいし、焦る気持ちになった。私が大好きな家族、彼氏、友達を一日、一日大事にしていこうと改めて思いました。

フリーカメラマン / 平沼 久奈

- 2010 年に読んだ漫画の中で、一番胸が痛くなった作品。だから、簡単に「これ、面白いから読んでー」なんて言えるわけもなく。自分の大事な人に読んでもらえればそれでいい。だがしかし、世にでないのはもったいない…。そんなせめぎあいがありつつ店頭に並べていた。唯一無二の存在である妻をなくした時、男はなにをするか。新しい人を好きになる？自分も後を追う？いや、彼は「作品」という形で、妻が生きた証を残したのだ。

三省堂書店神保町本店 コミック担当 / 赤坂 真実

- ここまで主観的な感覚をマンガは具現化出来るのだと驚いた。

Juvenile. 音楽家 / 児嶋 亮介

- 力のあるギャグ漫画家がシリアスを描いたときの底知れなさはなんなんだろう。これほど本人につらい状況を、冷静な観察力で、甘えを感じさせずに描いている。また、徹底して自分の描写に終始していて、安易に娘を道具として使わなかったところがよかった。

大日本印刷 / 佐々木 愛

- 愛した妻を失うということを、まっすぐに、淡々と描く。妻との日常、その突然の死、葬儀、そして彼女を欠かせながらも娘と過ごさなければならない日々。その描写が、どのような心情に耐えながらのものか、と、そこに気付いたときに、涙をにじませずにはいられない。

ブロガー / サイトウ マサトク

- 『「つらい時につぶやける名前があるのは素敵なこと」とキホは言った』突然妻を喪った作者の喪失から再生、希望への物語。上野氏の描くそれは生々しく、匂い立つような質感を持つ。読んだ人の年齢、立場によって受け取り方は変わってくるように思う。感情を描写する時の言葉だけではなく、空間が歪むような、その場に溶けだすような表現に同調し、錯覚を起こしそうになる。年齢を重ねるごとに、それは現実味を増していくのかもしれない。今一度、家族はもちろん、回りで支えてくれるかけがえの無い人達への想いを改めて考えさせられる一冊。

啓文堂書店 府中店 / 山本 仁美

- 「友達に勧めたい」という趣旨でマンガ大賞を運営させていただいてますが、明らかに、気軽に、勧めていい作品ではありません。しかし、自分がたいせつだ、と思うものをたいせつだと思ってくれる人が友達だとするならば、逆に、この作品をみてなにか思う人が、友達なんだと思います。 テーマそのものの強烈さについては、私にはもう、「読んで」以外の言葉はありません。 それだけでなく、マンガの表現としても、一力所たりとも、手癖や怠惰で手を抜くことの出来ない、やむにやまれなさ、が、どこまでもどこまでもみちみちています。上野顕太郎さんが異能のギャグ漫画家としてイバラの道を歩んでいらっしまったのは、ご本人が望むか望まざるとはまた別の問題として、このマンガを物するためだったのでは、と思えてなりません。 別次元の作品、です。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- 「愛する人の死」作品の場合、死んだ人に話の焦点が当てられ、その美しい生涯が残されたパートナーの視点から描かれるというのが多くあるパターンですが、この作品は逆にひたすらに残されたパートナーの話に終始しています。絶望に陥った男が、再び立ち上がるまでの物語。劇的なドラマがある訳ではなく、結末時が経つしかないのですが、それでも読ませる作品にする作者の力量がすごいと思います。

ジュンク堂書店新宿店 コミック担当 / 小磯 洋

- 嗚咽するほど泣きました。

PENICILLIN(vo)/HAKUEI

マンガ大賞2011 ノミネート作品

別冊少年マガジン / 講談社

「進撃の巨人」 諫山 創

選考員コメント・1次選考

- 2010 年の漫画というこの作品を挙げざるを得ないでしょう。荒々しく、粗く、勢いよく。今年一番のインパクトを残してくれました。正直絵は好みの分かれるところですが、逆にそれが巨人の怖さを生々しく表現していると感じます。

フルハウス八戸ノ里店 店長 / 佐藤 誠

- 今回、欠かすことはできないこの作品！圧倒的な存在感。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

- まさに 2010 衝撃の 1 冊。連載当初からなんだこのマンガ！と驚きつつ恐怖しつつ読んでましたが、1 巻目出る時皆に勧めるにあたり、あまりにも説明が下手で最初分かってもらえなかったのが懐かしいです。今や大ブレイク中の作品。自分は間違ってた自信を持ちつつ、まだまだこれからの作品を先生がどう味付けし、恐怖させ、希望を持たせ、そして絶望させるのか楽しみでなりません。

三省堂書店海老名店・嘱託社員 / 近西 良昌

- 次の先の展開が読めない漫画です。巨人の怖さが不気味であり人間の立場が絶望的でありミステリーの部分も気になる。この漫画を読むとまさに一撃にされます！

JACK 鷲津駅前 BOOK 館・コミック担当 (湖西市) / 内藤 沙織

- いやぁ～、あえて 2 次選考にも残ると思い、外そうと思ったのですが、やっぱり素直にならないといけなそうと思い選びました。1 巻の衝撃は、凄かったの一言につきると思います。1 巻が発売されてすぐ、まだ話題になる前に、たまたま表紙のインパクトに引きこまれ買ってきてもらったのですが、その拍子に負けずと劣らずのストーリーにぶっ飛びました。見事に読み手の予想を覆したストーリー展開、とにかく 1 巻目のインパクトにつきると思います。まだまだ、いろんな作家さんが出てくるなって、感心しました。

COMICCOZZLE 店長 / 野田 真人

- 設定も絵もすごい。この作者の脳は宇宙につながってると思う。

Grick (コンポーザー & アレンジャー) / 和教

- 久しぶりに、漫画を読んでいる部屋に緊張感がはしった。早く次のページ、次のページが読みたいと一気に読んでしまう。そして予測できない展開。架空の世界が、実際存在するかのように細部まで考えられているかが伝わってくる。んー早く続きが読みたい。

バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- すでに十分話題になっているが、絵の荒々しさ、物語もぱっと見、同じく荒々しく感じるのに続きが気になって気になって、今一番続きを読みたくなっている漫画です。

メガマソ・ギター / 涼平

- 人が巨人に喰われる世界。捕食される恐怖、絶望、かすかな希望。想像を超える物語です。すでにたくさん評価されてるけど、入れざるを得ない面白さ。この先どう展開していくのか全くよめません！

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- まさに王道少年漫画！衝撃的！こんなにわくわくする漫画は久しぶり。「寄生獣」を初めて読んだ時の感覚に近いです。緊迫感と絶望感、そして恐怖感満載。世界観と心理描写が素晴らしい！どのキャラクターにも感情移入がしやすい。ネタバレになるので詳しくは書きませんが、1 巻前半のエレンの母親の台詞で「あ…い…行かないで」って言うシーンがあって、それが凄くリアルで、人間臭くて。その部分だけでも大絶賛したいくらい。母親が子を守るシーンって結構色んな漫画で出てきたけど基本的に母親を美化し過ぎる気がするからさ。母親だって人間なんです（当たり前だけど）。怖いものは恐いんです。そんな感じで今連載している漫画の中で一番続きが気になる漫画！

シンガー / 山野井 千佳

- 高さ 50m の壁にぐるりと囲まれた街。人間は外の世界を知ることのないまま、鳥籠のような街の中で一生を終える——。謎の巨人たちによって人類は喰い尽され、生き残った者たちが築いた壁によって 100 年間平和を享受してきた世界。しかし今、壁を超える超大型巨人が現れたことでこの平穏が崩れることに！絶望的とも思える巨人 vs 人間のバトルシーンの緊迫感や作り込まれた壮大な世界設定、登場人物たちの心の叫びに圧倒され、「これからどうなるんだろう！？」っていうドキドキ感を味わわせてくれます。とにかく手に取ってみてください！特に 1 巻の終わり方には意表を突かれます。この終わり方で続きが気にならないはずがない！

カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社 / 豊島 さやか

- 巨人がせめてくるというストーリーがまずキャッチー。最近何かと話題に上がっているので、話題性も高く、今年のマンガ大賞にはぴったりかなって思います。

グラビアアイドルの威を借るヲタ / 喜屋武 ちあき

- 久々にワクワクする漫画。最終的な完成度に多いに期待！！

Juvenile. 音楽家 / 児嶋 亮介

- なんなんだコレはと思いつつ、止まらない作品。巨人と人間の関係を深読みすると、人間関係での心のふれあいにも共通してくるのかもしれないあゝ・・・なあって考えちゃいました。

フジテレビアナウンサー / 松尾 翠

- いろんな意味で衝撃的。

公務員 / 東 くるみ

- 設定のインパクトと絵が凄い！！

PENICILLIN(vo)/HAKUEI

- コタツでみかん食いながら、ごろごろしてモンハンしていると、人間がヒエラルキーのトップで “人間様” であることを疑いもしくなりますよね。純粋な力をもつ動物という目線での自分達の弱さを忘れてしまう。だから自分より強いものが現れたときに醜い部分、弱い部分をもろに出すのだろうなー。今のところこのマンガには絶望感と巨人の気持ち悪さがあふれてます。でも続きが気になります。ハッピーエンドになることをいろいろばかり。少年誌なんだからその可能性はまだあるはずだ…。

鳥取県 米子高校 美術部 & マンガ研究部顧問 / 佐川 由加里

- 1 巻からぶっ飛んでます。とにかく 1 番でした。巨人たちの表情、喰われていく仲間、絶望的な戦況でしかも食糧不足の危機。恐怖に負けて戦線から離脱しようとする兵士を踏みとどらせる隊長の言葉。読んでる最中はきっとかなり目を見開いてまるで巨人の様な顔をしながら読んでいたと思います。きっと自分だけじゃないと思いますし、これから読む人たちも絶対そうなると思います。

ミュージシャン / TA-SHI

- 文句なしの一位。絶対的強さをもつ巨人から生まれる、驚異や絶望感。そして、人がただただ喰われていく様は、リアルな恐怖感を感じました。

DJ/DJ RANUMA

- 巨人が理由なく人間を補食する世界を描いた SF 巨編。予想不能な展開で、文句なくおもしろい。食べる、食べられるをつきつめて描き「フードまんが」の傑作になる予感。

料理研究家 / 福田 里香

選考員コメント・2 次選考

- 未読だった為今回の審査の為、とりあえず1巻だけ買って読みました。…1巻だけ、とか無理です。すぐに2巻、3巻を読みたくてたまらなくなりました。10年後に名作と呼ばれ、読まれ続けるかは今後の展開にもよると思いますが、今現在、勢いがある面白いのは間違いないと思います。とりあえず、個人的に今後も買い続けてしまう率は一番高そうです。

リブロ池袋本店 コミック係 / 小池 由記

- 文句なしに、今一番わくわくしています。絵の荒さすらも勢いを出している気がします。

メガマソ・ギター / 涼平

- 今とにかく売れているコミックなので悩みましたが、自分の心に正直になろうと思い選びました。読んだ時の絶望感は半端なかったですが、救えないマンガとも思いましたが、その世界観で生きる主人公たちが絶望しながらも諦めず、生きること、倒すこと駆逐することに執着しているのがすごい。絶望だけでなく、小さい希望もちらつかせているところが読ませるなぁと入り込んでしまう。今熱いコミックといえばこれでしょう。読まねばならぬコミックです。

三省堂書店 海老名店 / 近西 良昌

- もうすっかり有名な作品になったけれど、この作品はやっぱりすごい。久しぶりに、漫画を読んでいる部屋に緊張感がはしった。早く次のページ、次のページが読みたいと一気に読んでしまう。そして全く予測できない展開。架空の世界が、実際存在するかのように細部まで考えられているかが伝わってくる。んー早く続きが読みたい。

バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- 人間のリアルを体感できる一冊。城壁の中での安住に疑問を抱き、巨人を駆逐しようとする衝動など描写が秀逸。主人公は精神的に完璧な主人公ではなく、この点では現代のメインとなる人物像として共感もてる。人類の存亡を賭けて巨人と闘う主人公としては最適なモデルであり、巨人との戦闘には大きな興奮と達成感が味わえる。

イラストレーター / 新井 文月

- とにかく少年マンガとしてとても新しい。

公務員 / 東くるみ

- なんだかんだ言ってもやっぱり2010年はこれを見逃すわけにはいかんでしょうということで。ぶっちゃけひさかたぶりの「少年マンガ」の大ヒット作品なんじゃないでしょうか。次の巻が待ちきれなくて、やきもきするのがマンガの醍醐味であることを思い出しました。絵にとっつきにくさはあるものの、そこがま絶妙な味になっていることも事実。「絶望」の先にあるものを知りたい方にぜひ。巨人おっかないよねー。

オリオン書房 ルミネ店 / 池本 美和

- 絵はB級ですが、世界観、ストーリーがS級。まだ3巻しか出ていないので今後どうなるかはわかりませんが、現時点では続きが気になるコミック NO.1 です。

リブロ 横浜相鉄ジョイナス店店長 / 伊藤 晃

- やはり最高に設定も、絵も最高です。この漫画すごいとのヒトコト

Grick (コンポーザー & アレンジャー) / 和教

- 巨人が理由なく人間を補食する世界を描いた SF 巨編。予想不能な展開で、文句なくおもしろい。食べる、食べられるをつきつめて描き「フードまんが」の傑作になる予感。

お菓子研究家 / 福田 里香

- 絵より、マンガそのものより作者の勢い、攻めの姿勢がマンガに乗り移っている。面白い。

Juvenile. 音楽家 / 児嶋 亮介

-
- 発売されたのを見た時の表紙のインパクトは何とも言えないくらい凄くて、すぐに知人を買ってきてもらいました。そして中身を読んでみて、ストーリーが表紙以上のインパクトで次の巻をすぐ読みたくなりました。イラストは粗削りですが、勢いがあり魅力的です。そして、韓国でも先日発売されて、あっという間に話題になり、すぐに重版がかかりました。日本よりも漫画が売れない韓国で、これだけ話題になるのは珍しいです。世界で売れている作品を薦めない訳にはいかないでしょう！今年、ナンバー１は、この作品にしたいと思います。

COMICCOZZLE（韓国）店長 / 野田 真人

- やはり選ばないとダメでしょう。１巻を読んだ時の衝撃は忘れられません。売れ行きを含めても２０１０年を代表する１作になったのではないかと思います。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- 本年度、最も印象的で楽しめた。絵のヘタさが逆に味をだして、巨人に攻撃をする時の腕の曲がりっぷりはたまらない。ストーリーもこれから、まだまだ、もっと面白くなるような気がして２０１１年度もめが話せない作品です。

DJ/DJ RANUMA

- この先、絶対に面白くなるだろうと期待させられるエネルギーがすごい。

PENICILLIN(vo)/HAKUEI

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2011

マンガ大賞2011 ノミネート作品

モーニング・ツー / 講談社

「刻刻」 堀尾省太

選考員コメント・1次選考

- これもまた衝撃を受けた1冊。時が止まった世界(止界)で物語が進む。最初意味が分からなかったけれども、読んでいるうちに、その緊張感あふれる展開や謎めいた生物、そして主人公達を狙う謎の団体、主人公の力の覚醒などなど引きこまれる展開にページをめくる手が止まらなくなります。このすごい漫画を読んで同じ気持ちを味わってほしい！

三省堂書店海老名店・嘱託社員 / 近西 良昌

- 時が止まった世界の中で起きる予測不能な展開。そんな荒唐無稽な世界でも登場人物たちにリアリティを持たせることで、説得力をもたせてる。特に暴力の描き方がうまい。細部までしっかり考えられて描きこまれ、構成されているので何度も再読して、そのテクニックを楽しむことができる。

書楽 阿佐ヶ谷店 / 石田 充

- この世界観がたまらなく好きです。今後の展開が最も気になる作品。

株式会社ネビュラプロジェクト プロモーション・ディヴィジョン / 小森 和博

- 限られた人しか入れない、時が止まった世界、止界の中でのお話。何かアクシデントが起きた時に読んでいるこっちもハラハラしてしまうので息遣いが荒くなるマンガでした。

フリーカメラマン / 平沼 久奈

- この世界に入りこんだらどうしよう…って漫画なのにそこまで本気で考えてしまいました。引き込まれてる証拠です。「人とは違う能力」「対立するもの」がを含みながら実は「家族の物語」だと思うのは深読みしすぎでしょうか。とまあ難しいことは考えずハマってほしい作品です！

アバンティブックセンター京都店 コミック担当 / 中村 真依子

- 刻刻のこくは、慟哭のこくですか？漫画好きには「寄生獣」を彷彿させる作品。最近流行のパニック系かと思いきや、もうちょっと深い何かがある…気がする。おもしろい。読むなら今かな。

三省堂書店 神保町本店 / 赤坂 真実

選考員コメント・2 次選考

- 発想、展開どれをとっても素晴らしい。1 巻の男性陣の駄目さ加減と 3 巻でもまだイマイチ駄目な男性陣。いつかカッコよくなるのか、そこにも期待している。

成田本店とわだ店 / 安田 幸

- もっと早く読んでおけばよかったー！

医師 / 岸本 倫太郎

- 一瞬の非現実世界を舞台に現実的に展開される物語。3 巻にして、徐々に解明されつつある謎も、さらに深まるばかり。マンガとはこうあるべきだと気づかされました。是非読んでいただきたい傑作です。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口 健

- 1000 分の一秒をさまようこのマンガは、敵も味方もルールから模索する。一つ一つのルールが明らかになっていくにつれ、単に敵味方でない思惑が交差し、複雑な関係を織り成していきます。ただのミステリアスでない、またただのドッキリなマンガではない、果てしない緊張感が楽しめるマンガです。ていうか、次の巻を早く読みたい！！！！（超気になるところで終わりすぎ！！！！）

リアライズ・モバイル・コミュニケーションズ / 金子 幸恵

- 止まった刻の中で描かれる『自由』と『束縛』。ひとつひとつ語られていく真実がその刻の中に生きる人々の人生を左右していくさまに、心地よい緊張感を抱きながら読み進める快感！次のページで何を仕掛けてくるのか？そういう期待にページを捲ることが本の持つ醍醐味でしょう。そういうことを実感できる 1 作でした！

芳進堂ラムラ店・コミック担当 / 川崎 一利

- まだ 3 巻までしかありませんが、これからますます面白くなると確信しています。今続きが最も気になるマンガです。

株式会社ネビュラプロジェクト / 小森 和博

- 自分はコミックス派なのでこの発売スピードはとても悶々としします。こんなに面白いのに殺生でございます。

ミュージシャン / TA-SHI

- 刻が止まった中で、動く世界と止まった世界の不思議な描写がうまい。さらに、止まった世界「止界」にはルールがあるという斬新な設定に圧倒されました。読み出したら止まらない衝撃。先が気になってしょうがないコミック No.1 です。

三省堂書店 海老名店 / 近西 良昌

- この作品の世界のいろんなことを理解する前に、どんどん展開していくストーリー。おいてけぼりなのは時間が止まったせい？家族 VS 宗教団体、攻守が目ぐるしく入れ替わり、それぞれの感情が交錯するとき、また、何かが起こる。息をのむひまも与えてくれない超一級のサスペンス。ふわー、こりゃあすげえや。なにがなんだかよくわからないまま巻き込まれた人たち（主に家族）の気持ちになって読むと、激しく共感すること請け合い。

オリオン書房 ルミネ店 / 池本 美和

- 何と言うかもう、設定もテンポも素晴らしい。審査のために初めて手に取ったが、絶対続巻も読むだろうね。

IT 系企業経営・元漫画編集長 / 平田 淳

- 時が止まった世界の中で起きる予測不能な展開。そんな荒唐無稽な世界でも登場人物たちの心情や、行動にリアリティを持たせることで、魅力的なストーリーになっている。特に暴力の描き方がうまい。細部までしっかり考えられて描きこまれ、構成されているので何度も再読して、そのテクニックを楽しむことができる。先読み不可能なストーリーこそマンガの真骨頂。

書楽 阿佐ヶ谷店 / 石田 充

-
- 細やかなディテールと確かな構成力。本当にこれが連載デビュー作？末恐ろしい新人作家の、緊張感あふれる SF ミステリー作品。場面展開を自宅から数キロ以内の狭い範囲に絞り、限られた人数の中で進めていく形は、舞台演劇を彷彿とさせます。緊張の連続で、ページをめくるスピードと心拍数はどんどん上がっていく。まさに目が離せない作品です。

フルハウス八戸ノ里店 店長 / 佐藤 誠

- 刻々と…。タイトルからは内容が想像も付かなかった。1 巻目、ためしに読むと次が気になって気になって。流行のパニックモノでありながら、ミステリー要素も含んだ作品。これは素直に「おもしろいよ」って薦められるのがいい。

三省堂書店神保町本店 コミック担当 / 赤坂 真実

- 絵は粗いところもあるが、息つく暇を与えない手に汗握るような緊張感がすばらしい。

大日本印刷 / 佐々木 愛

- 刻々と…。タイトルからは内容が想像も付かなかった。1 巻目、ためしに読むと次が気になって気になって。流行のパニックモノでありながら、ミステリー要素も含んだ作品。これは素直に「おもしろいよ」って薦められるのがいい。

三省堂書店神保町本店 コミック担当 / 赤坂 真実

- フィクションにおける奇想、は何のためにあるのか。それは、奇想を梃子の支点にして、普段では見えてこない、人間のリアリティをこじ開けるためにあるのだと思うのですが。この作品の奇想は、そのテコでその蓋をこじあげちゃうの？ と人間のあまりに意外な面をつきつぎと剥ぎとってみせます。誤解を恐れずに言うなら、いま一番デスノートに近い作品です。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

くまの大大賞
Cartoon grand prize
2011

マンガ大賞2011 ノミネート作品

月刊少年マガジン / 講談社

「ましろのおと」 羅川真里茂

選考員コメント・1次選考

- 羅川さんの作品は少女マンガ誌の頃からずば抜けた少年マンガ力だよな、と思ってましたが、いよいよその力を遺憾なく発揮してしまったかと。『音を読ませる』。そんな感じですね。お見事！

芳進堂ラムラ店・コミック担当 / 川崎 一利

- 「津軽三味線」と言う楽器を通して奏でる者の人生も聞く者の人生も変えてしまう魅力（= 魔力！？）に読む者も引き込まれないはずがないと痛感。マンガでありながら主人公雪の演奏シーンは本当に津軽三味線の音が聞こえてくるような勢いが感じられます。雪と梅子のセッションシーンは鳥肌モノですぜ！

元レコード店コミック担当 / 阿部 大介

- 音のしないコミックから溢れ出る音に圧倒される。まさに「ましろのおと」セリフのあるコマより、セリフのないコマの人物の表情を読むのに余念がない。

家事手伝い / 濱田 健太郎

- 読後「へば！」と口に出したくなった作品。主人公の奏でる音が聞いてみたくなる作品。自分と向き合い成長する真摯な姿は自分の生き方に照らし合わせて反省してしまいます。

会社経営者 / 小野 ゆうこ

- 羅川真里茂、初めての男性誌での連載！そしてテーマが津軽三味線。キャラクターはかわいいし、三味線を弾くシーンはかなり迫力があって、非常におもしろいマンガだと思います

グラビアアイドルの威を借るヲタ / 喜屋武 ちあき

Cartoon grand prize

2011

選考員コメント・2 次選考

- 演奏シーンの絵が素晴らしい。読んだ後、津軽三味線が聴きたくなる。

成田本店とわだ店 / 安田 幸

- 津軽三味線。青森弁。漫画だから音はないのですが、たくさんの音が、確かに聞こえます。胸にドンと響いてきて、泣きそうになります。ユナさんとの話がとても好きです。男女問わず、引き込まれて、ドキドキして、キュンとする。心が大きく動くのが、自分で分かると思います。ぜひたくさんの人に読んでいただきたいです。1 巻の発売当初、表紙を見て、どんな話なんだろうと思いました。結局そのままになっていて、今回このような機会がなければこの漫画を読んでいなかったと思います。読むことができてよかったです。ありがとうございました！

金海堂隼人国分サティ店 副店長・コミック担当 / 園田 美智子

- 聴き手によって育てられる、という設定がいいと思います。素直に読みました。

会社経営者 / 小野 ゆうこ

- 勢いやテンション、題材などにおいて、個人的にはこの作品が 1 位でもいいかなとは思ったのですが、2 巻しか出ていないので 3 位にしました。5 巻くらいたまったところでバーンと評価されて、ドーンと売れてほしい。

ライター / 芝田 隆広

- 津軽三味線を生で聞いたことがありませんが、音楽は生で聴くものだと思います。ですが、音を出せないマンガで、ここまで想像力を掻き立てられ、鳥肌が立つというのは、音楽のもう一つの表現方法なのかもしれません。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口 健

- 少年マンガの王道を行く熱い展開が繊細なタッチで描かれ、「音の表現」が臨場感に富み、実に秀逸。

明文堂書店金沢野々市店 BOOK フロアー長 / 木村 俊介

- 津軽三味線をテーマにした作品。三味線が持つ荒々しさ、骨太さ、そして波がはじけるような繊細さがよく絵に表れていると思いました。音楽を表現するうまさ「のだめ」に匹敵すると思います。またストーリーも、兄弟の融解などいいエピソードがたくさん。心があったかくなりたいた人はぜひ読んで欲しいと思います。

リアライズ・モバイル・コミュニケーションズ / 金子 幸恵

- マンガ好きでも、津軽三味線好きでも、そうじゃない人でも、沢山のの人に勧めたい！と思えた作品です。これからの盛り上がりにも期待。

元書店員 (三省堂書店経済産業省売店勤務) / 畑中 瀬路奈

- ムチャクチャ悩みました！アレを入れるべきかどうか。現状として十分動いている作品です、アレは。やはり私はこの大賞では『推せばもうひと越えするもの』を単純に推したいんです。なので敢えて外して考えることにしました。羅川さんの作品は『王道』だと思います。昨今、話題に挙がるものは『変化球』が多くなっていると思います。そんななか、王道はゼッタイ廃れないという願いを込めて『ましろ』を 1 位にします。表現が難しい『音』を見事に描いていると思います。まさに『音を読む』感覚。挫折、出会い、そして復活、躍進！少年マンガらしい作風は、年代性別を超えた人生讃歌だと。今後、主人公たちはどこに走っていくのか？見逃せない 1 作です。

芳進堂ラムラ店・コミック担当 / 川崎 一利

- 真っ白って事は、何も無いんじゃないかと、何にでもなれるという事。主人公の心にいろいろな人の想いが旋律として刻まれて、セッションしていく様子に胸が熱くなりました、今年はコレをオススメしたいっ。

家事手伝い / 濱田 健太郎

- 才能を描いた物語はいつも、才能なき者たちの心を引きつける。努力を描いた漫画家いつも、努力に欠けた者たちの心を奮い立たせる。津軽三味線という日本的で情熱的な題材を軸に、才能と努力のせめぎ合いが描かれるドラマに、魅了されない者はたぶん、この日本にはいないだろう。読めば誰もが手に三味線を奏でてみたくなる。あるいは何か始めてみたくなる。才能がなくとも前を向け。努力に欠けているなら取り戻せ。その先にきっと、開けた地平があるはずだから。

書評家 / タニグチリウイチ

- 少女マンガで一線を駕した作者が描く初の少年漫画がこちらですが、「津軽三味線」という楽器にスポットを当てた所からまず興味を惹かれます。そして読んで行くとなにより主人公の若さと情熱がひしひしと伝わって来てそれに付随して音の聞こえないはずのマンガから、三味線の音が頭の中で再現されて行くような迫力のある作品です。まだ二巻しか出ていないですが、その中だけでも主人公の身辺がグルグルと変って激動して行く展開速度、次々と登場するとても個性的なキャラクター達は、読んでいる読者を飽きさせません。三味線ではなくても、自分の好きなことや不完全燃焼なことなどを全力でやりたくなる読後感も心地よいです。行動力が欲しい時に読むと、きっとプラスになると思います。そんな素敵な作品です。

まんが王 八王子店 / 日吉 雄

- 羅川真里茂の少年誌連載、記念すべき第一作。大賞選考にかけるには、もう何巻か進んでからのほうが良いだろうと、今回はこの位置（3位）を選びました。まだ始まったばかりの作品ですが、とにかく三味線の見せてくれる風景が凄い。音の幻がびんびん耳に響いてくる…。雪（せつ）が、これからどんな景色を見せてくれるか。楽しみにしながら物語の進行を待とうと思います。

書店員（啓文堂書店三鷹店）/ 山川 美香

- 音楽を題材とした作品で、常に問題になるのが「音」「音楽」の表現だと思うのですが、この作品からは間違いなく津軽三味線の音が、ビートが、切なさが聞こえてきます。ライバルの登場で、雪の三味線がどう変わるのか、先がとても楽しみです。

おたく史研究・腐男子 / 吉本 たいまつ

- 早く続きを読みたいというもどかしい気持ちと、ゆっくりと動き始めていく物語をじっくりと味わいたい気持ちとが半々です。いくつも散りばめられた点がこれから結ばれていくのが楽しみです。

教師 / 持丸 宏司

- 「津軽三味線」と言う楽器を通して奏でる音が、奏でる者の人生も聞く者の人生も変えてしまう魅力（＝魔力！？）に読む者も引き込まれないはずがないと痛感。マンガでありながら主人公雪の演奏シーンは本当に津軽三味線の音が聞こえてくるような勢いが感じられる。雪が奏でる津軽三味線の音色と梅子が唄いあげる独唱のセッションシーンに鳥肌です。

元レコード店コミック担当 / 阿部 大介

- 最初、何の音楽マンガだろうと思い読み始めましたが三味線と言う所に意外性を感じました。このマンガを読んでいると、少し、津軽三味線にも興味もてます。若者が家を出て上京というテーマが、この三味線一つの表現でリアルさが増すような気もしました。兄が未成年というのに一番びっくりしました。

フリーデザイナー / 平沼 寛史

マンガ大賞2011 ノミネート作品

ヤングキングアワーズ / 少年画報社

「ドリフターズ」 平野 耕 太

選考員コメント・1次選考

- スーパー武人大戦。今後どこまで広がるか、期待大です。

会社員 / 林 礼春

- キャラクター設定と世界観だけで十分たのしめるマンガです。

デザイナー / 佐藤 優

- ザ・冒険活劇！これが嫌いな男はいない！！女子のことはよくわかりませんが好きな人は好きなんじゃないですか(適当)。謎に包まれた設定の引きの強さもハンパない。男子の正しい妄想力！！改めて「漂流者たち」って意味なんだと考えると、ドリフってなんてカッコいい名前なんだったって思った。

ヴィレッジヴァンガード町田 店長 / 大山 敏樹

- あの HELLSING の平野耕太が描く英雄たちのファンタジー戦記！面白くないわけがない！

信長書店 四条河原町店・アルバイト / 中村 誠亨

- 一コマ一コマ、ネームの一言一言がケレンにうち満ちていて、とにかく読んでいてアガる。ド迫力のスーパー戦人（いくさびと）大戦。

書評系ブログ「yama-gat site」管理人 / yama-gat

Cartoon grand prize

2011

選考員コメント・2 次選考

- ～と～が夢の対決！みたいな映画や漫画がここ数年多い中、なるほど偉人たちのタッグマッチバトルという発想もあったか！とワクワクしてしまう漫画です。一見よくありがちなファンタジーの世界観も、実在した偉人が暴れまわると、まったく新しいものに感じるから不思議です。まだまったく先が読めないのも、早く続きが気になる漫画です。

デザイナー / 佐藤ユウ

- アラサーな僕の中の「中2魂」を激しく揺さぶってくれました。これぞマンガ！

アンチバッティングセンター / 増山 寿史

- 歴史や軍事やゲーム好きの男の子の、夢と妄想をそのまま形にしてくれたようで、燃えないわけにはいきません！それでいて、軽妙にキマるギャグも良いし、キャラもドギツイアクを持ってるし、何から何まで目が離せません！

ひょうたん書店 西田本店 / 筒口 征洋

- 稀代のカリスマ漫画家を推す機会は逃せない——という意識を抜きにしても、完成されたリズムとアクションを備えた時代ファンタジーとしてポイントは高い。

ライター / 福井 健太

- 暴力！ 鮮血！ 爆笑！ バイオレンスな漫画なのに「爆笑」が入るのは、ドリフターズとは全員集合のことかと思うくらい吹き出したから。のっけからハイテンションで、この先が楽しみです。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本 さとみ

- 歴史上の人物が異世界に飛ばされて活躍する話です。登場する人物たちのチョイスも個人的にすごく好きです。主流も混ぜつつ、渋目のチョイスもあり、菅野直とかたまりません。強めの線で大胆な構図で描かれる世界、魅力的で癖のある登場人物。ライトなファンタジーが多い中、久々の骨太のファンタジーって感じのマンガです。

IT 系企業 / 廣瀬 公将

- 織田信長、ジャンヌダルク、那須与一といった歴史上の「英雄」たちがファンタジー界に召還され繰り広げられる MIXED の世界観。私は正直、嫌いでない。マンガに求めるのはノンフィクションではなく、リアリティあるファンタジー。その点においてはエルフやドラゴンが甲冑を纏った者と対峙するのは、NG どころか血が騒ぐ。それを裏付ける爽快感があるので、そっちの世界に陶酔するなら本書はうってつけの一冊だ。

イラストレーター / 新井 文月

- 別の作品のコメント欄で、お勧めする作品の『勤め時』の話を書きましたが、そんな理屈を軽く吹っ飛ばしてくれるのがこの『ドリフターズ』です。のっけからエンジン全開、ハイリスクノーリターン！オーケーオーケー知ってる Yo!!! だって平野耕太だもん！ハッピー!!! そんなノリで、素敵な異世界へ連れて（連行して）行ってくれます。まだたった 1 巻しか出ていないのに！個人的にはジジイども（ハンニバルとスキピオ）の活躍が死ぬほど楽しみ。

書店員（啓文堂書店三鷹店）/ 山川 美香

- 作者の狂いっぷり、暴走ぶりが素敵すぎる。このままどこまでも突っ走ってほしい。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

- これからに期待大！わくわくする。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

- 平野先生が描くスーパー超人大戦。まるでキューブリックの映画を思い起こさせるような第 1 話。タランティーノ以上に軽快なキャラクターたちの掛け合い。立ちまわったキャラクターの魅力に惹きこまれます！まさに圧倒的！

COMIC ZIN コミックバイヤー / 塚本 浩司

-
- このマンガの設定が面白いと思いました。時代を超えた歴史上の人物が、一つの場所に集まって戦うというこの構図が好きです。まだまだ、序章の一巻という感じもありますが、これからの期待値は大でした。これから、更にどんな歴史上の人物が参戦してくるのかという所と、それが敵か味方なのか！とても気になります。

フリーデザイナー / 平沼 寛史

- 昔から、ゲームでも漫画でも、時代や民族を越えて強いものが集まり、ドンパチするものってあったとおもうんだけど、平野耕太のキャラのチョイスや、それぞれの性格がかなりツボです。相変わらず、ギャグパートもおもしろい。妖怪首おいてけはこれからどうなっていくのか、今後どんなキャラがでてくるのか楽しみな作品です。

鳥取県 米子高校 美術部 & マンガ研究部顧問 / 佐川 由加理

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2011

マンガ大賞2011 ノミネート作品

クロフネ ZERO/ リブレ出版

「ドントクライ、ガール」 ヤマシタ トモコ

選考員コメント・1次選考

- なんだろう、エロくない裸って面白い。今年一番、勢いのある笑いとドキメキをくれたマンガ。だいが急展開で話が終わってしまうのが寂しい気持ちもあるけれど、そのくらいがちょうどいいのかな。ちなみに私にも女子機能「理解できる下ネタもインターセプト」機能、あります。

バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- 裸族の男と同居することになった女子高校生の苦悩(?)の日々。部屋の中に入ったら股間に障害物が、とか、やったら長いモノローグとか、セリフにモザイクとか、マンガ的技法を的確におもしろく使いつつ、ちょっと良いシーンや少女マンガ的ときめきの部分もちゃんとあり。マンガ表現の幅は無限大と思わせてくれる 1冊です。

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- ヤマシタトモコが、去年最も活躍した描き手の1人であったことに、異論を唱える人はいないだろう。本作も「裸族」という特殊設定を、怒濤の狂気のネームがオーバーライドするというトンガリぶりが、圧巻。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

- いやもう、ただただ、大変にアホらしい(褒め言葉)。その割に女子の女子たる生態を描きだす観察眼だったり、毒だったり、それなりにいろんなものも潜んでいるような気もしますが、まずは笑えばいいんじゃないかな。実際に起きるわけがない、だけど「起きたら」と思うと実に楽しい。「マンガ的」なマンガだと思います。

ジュンク堂書店 池袋本店 / 田中 香織

- ヤマシタトモコの作品はBLから入り、イルミナシオンの登場人物の心理描写にぞくぞくしたのを憶えてます。「ドントクライ、ガール」のタイトルと表紙だけ見て、いじめモノか何かだと思ったら「裸族の男との同棲」という、そんなバカな・・・！？なストーリー。絶対描いていて楽しかったろうな。家に入った瞬間、股間が目にはいらなくなるという障害物の配置の工夫には大爆笑でした。

鳥取県 米子高校 美術部 & マンガ研究部顧問 / 佐川 由加理

- やっぱり夏季限定裸族的には、押しときたい！

フリー WEB デザイナー / 河本 知香

選考員コメント・2 次選考

- 知的に下品！！なのになぜか若干の爽やかさまで感じる。主人公の友人たちの終わり辺りのテンションの高さがおかしすぎる！

成田本店 とわだ店 / 安田 幸

- 同居している男が裸族である、というだけでここまで話を読ませてしまうのはすごい。あらゆるジャンルのどこにも属さない孤立した存在だな、と思いました。似た作品は今後も出ないでしょう。文句なしに面白かったと思うのに、人に薦めづらいのが難点か。

リプロ 池袋本店 コミック係 / 小池 由記

- 笑いたければ、読め。※コミックスの最後の漫画が世界観違いすぎるので要注意です

デザイナー / 佐藤ユウ

- 変態さんすらも受け入れてしまう結末に妙に共感してしまったので。

会社員 / 林 礼春

- シリアスな心理劇に長けた描き手だからこそ、おバカな状況設定が活きることもある。ホラ話と割り切れば急展開も許容範囲だろう。

ライター / 福井 健太

- 腹を抱えて笑いましたとも！トコトンお下品な筈なのに、ふしぎと不快感は無いんですね。

元書店員（三省堂書店経済産業省売店勤務）/ 畑中 瀬路奈

- 間違いなく今年一番ゲラゲラ笑いながら読んだ。迷わず読め！考えるな感じろ！

家事手伝い / 濱田 健太郎

- ヤマシタトモコ先生の作品の中では一番男性が読みやすいコミックはないでしょうか（笑）こんな変態マンガ久々でした。それでも、いやらしくないところがすっきりしていて良かったのでは。続きが読みたいと強く思いました。面白かったー！

三省堂書店 海老名店 / 近西 良昌

- 顔の整った変態がいっぱい出てきます。それだけで、読みたくなならない？（笑）2010年一番、勢いのある笑いとドキメキをくれたマンガ。だいが急展開で話が終わってしまうのが寂しい気持ちもあるけれど、そのくらいがちょうどいいのかな。ちなみに私にも女子機能「理解できる下ネタもインターセプト」機能、あります。

バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- 良い意味で「気がふれている」。この暴走作品を描ききった作者と載せた「クロフネZERO」編集部、双方の度胸に感心。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

- いつも全裸のイケメンと、女子高校生の交流を描くハートフル（！）コミック！部屋の中に入ったら股間に障害物が、とか、やったら長いモノローグとか、セリフにモザイクとか、マンガ的技法のおもしろさを的確に使いつつ、ちょっと良いシーンや少女マンガ的ときめきの部分もちゃんとあり。おもしろいです！

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- よしながふみを初めて読んだときのような衝撃を受けた。誰にも真似できない、オリジナルのセンスを持った方だと思う。

旭屋書店 船橋店 / 安田 奈緒美

-
- コメディとして一級品なのはもちろんのこと、思春期乙女の「大人」への階段をのぼる過程を描いた成長譚として読んでみるのもまた一興かと。たとえ相手が世間的に「変態」レベルの男だったとしても、好きになるときはしょうがないよねー、なんてったって乙女だし。なにはともあれやっぱりヤマシタ先生天才。漫画の申し子。これからも楽しく読ませていただきます！

オリオン書房 ルミネ店 / 池本 美和

- ヤマシタトモコという作家自体をオススメしたい！！！BL が苦手な方は多いでしょうが、このマンガなら大丈夫。いい変態、かきます。

フリー WEB デザイナー / 河本 知香

- 男子との同棲は、女子が心のどこかで夢見るものですが……。はたして、本当にいいものだろうかと悩ませてくれます（笑）

SHIBUYA TSUTAYA/ 実松 由夏

- この作品もそうですが、昨年この作家さんのいろいろな作品が店頭を賑わしてたそうですが、全ての作品を読んでみて納得しました。人によって好みの作品は変わると思いますが、まちがいなく女性読者の心を鷲づかみしたと思います。韓国に住んでいる事もあり、実は恥ずかしながら、つい最近まではこの作家さんを知りませんでした。でも、読み終わったら、韓国の読者にも作品が出たら薦めようと思えたので今回選びました。

COMICCOZZLE（韓国）店長 / 野田 真人

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2011

マンガ大賞2011 ノミネート作品

モーニング / 講談社

「主に泣いてます」 東村 アキコ

選考員コメント・1次選考

- ただ面白い。シチュエーションがあるだけで、ストーリーは全くなし。身近にいるちょっと変わった人より極端だけど、キ〇ガイまでいかず、行動原理が共感できなくとも理解はできるというギリギリのラインのキャラクターたちが生み出す、本人たちはいたって真面目な「シリアスな笑い」が素晴らしいです。美人モデルと彼女と不倫してる画家と画家の嫁と、過去に画家に捨てられた女と美人モデルに岡惚れしてる男と、登場人物たちを抜き出せばどうやっても昼ドラの題材です。愛憎渦巻くドロドロの世界が展開しそうですが、笑いにしかならない。舞台が上野近辺で、東京スカイツリーをバックとした、昭和臭さ漂う作品世界も不思議なおかしみを醸し出しているような気がします。

ジュンク堂書店新宿店 コミック担当 / 小磯 洋

- 美人ネタでこんな面白い漫画が描けるのは東村アキコの才能だ！出てくるキャラが皆濃い～んだけど、面白い。まだまだ隠された泉伝説の続きをこれからも読み続けたい！

株式会社ネビュラプロジェクト プロモーション・ディヴィジョン / 小森 和博

- 個人的には東村先生の最高の作品だと思います！いつも涙が出るほど大笑い。深夜に笑いながらオエッとなったぐらい笑った漫画。個性的なキャラクターと 30 代ドストライクの切れ味のあるギャグの連続！大人の方に特にぜひ読んでいただきたい！

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

- ハイテンションなギャグが飛ばしています！ 主人公は美人ゆえに不幸…。個人的に同姓同名なのでなんとか幸せになっていただきたいです。

主婦 / 紺野 泉

選考員コメント・2 次選考

- 私、美人じゃなくてよかったあああああ！…とまでは思いませんが、美人で気弱って大変なんスね…。仁さんにはいつもゴルァァァァァ！って拳振り上げたくりますよ。あと実は啓介くんを見た瞬間にこのイケメンと思ったのは内緒です…。サブタイトルには色々な曲のタイトルが使われているのですが、嵐の曲名が入っているのが楽しくて仕方ありません。最近『Crazy Moon ～キミ・ハ・ムテキ』を聴くとこのマンガを思い出すようになってしまいました。どうしてくれるんですか東村センセイ！

金海堂隼人国分サティ店 副店長・コミック担当 / 園田 美智子

- おかしい、という意味で突き抜けてました。声を出して笑ってしまう作品。あまり他作品のネタが増えてしまうとコバンザメみたいな作品になってしまう気はするので、どうか悩みましたがやっぱり面白かったので投票しました。

会社員 / 林 礼春

- 今までの東村さんのマンガの中で一番好きです。「自らの美しさを隠すために水木マンガのコスプレをする美女」なんて、天才としか思えない発想だ。

アンチパッティングセンター / 増山 寿史

- 永遠の3位！（笑）毎回3位に投票してますよ！『ひまわりっ！』『テンパリスト』『海月姫』と過去3回違う作品でエントリーされてくるコンスタントな作品の出来栄は、マンガ大賞の『大賞』でなく『皆勤賞』を東村さんに差し上げるべきではないかと（笑）記録以上に記憶に残るマンガ家・東村アキコ…恐るべしっ！

芳進堂ラムラ店・コミック担当 / 川崎 一利

- 久しぶりに電車の中で声を出して笑ってしまい、周りに白い目で見られるという屈辱を受けました。超美人の受難という設定と濃すぎるキャラクター達を愛してやみません。

株式会社ネビュラプロジェクト / 小森 和博

- 超越的に美女。けれども超絶的に薄幸。そんなキャラクターの存在感にされつつ、重ねられる笑いの表現に魅せられ、しらずきずり込まれている自分がある。シリアスな主題を、ビューティフルな絵柄で、コミカルに描いて他に追従する者なき漫画家のひとつの到達点であり、そして、さらなる広がりへと向かう出発点になるであろう作品だ。

書評家 / タニグチリウイチ

- 美しすぎる主人公（イケメン画家の愛人でもある）は、それがゆえに男を巡るトラブルに見舞われ続ける不幸な人生を送ってきた。でも、なんか明るい。じめっとしてない。ネタが突然ディープな水木しげるやつげ義春風なったり、東村ワールド炸裂。タイトルと違い、主に泣けない。

国分寺市議会議員 / 三葛 敦志

- 瞬発力が冴える一冊。物語としては「美人過ぎるが故に不幸なモデルが、人と接するため奇妙奇天烈コスプレを標準装備する」とんでもない話。これである。マンガで大事な事はリアリティではない。この空気感は解説できるものではないので、とにかく本書は黙って読んでほしい。多くの失笑を約束する。

イラストレーター / 新井 文月

- これはなにかココロの深いところにうたえてくるものがありますね。

Grick（コンポーザー＆アレンジャー） / 和教

- 1巻のラストカット。休みの日にはなにをしているのか？っていう問いへの泉の答えに泣きました。

アマゾンジャパン株式会社 エディター / 原田 圭

- 美人過ぎるのも問題か……。だったら、どの程度なら丁度いいのだろうか……。(遠い目)

SHIBUYA TSUTAYA/ 実松 由夏

- 今回が開催4回目のマンガ大賞において4回目の2次選考進出。しかも作品は毎年違い、そのどれもが面白い。東村アキコはほんとうにすごい。「海月姫」も少女マンガの定石をはるかに超えてかつ飛びの面白さだ(いったいどこからそんな発想が?)。とはいえ器用貧乏的なところがあったか(失礼だな)、自分が過去3回で2次に推したのはエッセイマンガの「ママはテンパリスト」のみだった。のですが、今回、これは推します。パンク魂を感じる、というのがその理由。なんというか、オトコ的なものに対するストレートな憎悪と破壊の衝動が創作のエネルギーの源になっている、と深読みさせる何かがあるから。出会ったすべての男性を瞬時に狂わせるほどの絶世の美女、という設定の本作の主人公、紺野泉。すべての男性キャラは彼女を前に、ほぼ条件反射的にストーカーまがいの求愛行動(笑)をとることを強要される。誰だろう、作者から。作者の企みによってとことん極端な設定に放り込まれることで、男性キャラは人格を完璧に破壊される。パンクだ。そんな、女の美醜しか見ようとしなない男の単純さを完膚なきまでに笑いのめし、容赦ないギャグに仕立てる作風は、男性読者(つまり私)にとって、ちょっと薄ら寒くもある。作者の観察眼を意識してよく考えれば。まあ、普通に読むならば爆笑に次ぐ爆笑で済んじゃうのだけれど(水木しげるキャラのコスプレの破壊力がすごい。小ネタもいちいちすごい)。東村アキコの視点はどこかフェミニズム的である。あまりに美しすぎてオトコ絡みのトラブルを招いてしまうせいでまともな職に就けない、だから無職、という超美女。そんな誇張された境遇は、強烈なギャグという確かな推進力を生んで作品をドライブさせる。でも忘れないで欲しい、人もうらやむ美貌の主人公は、これっぽっちも幸せじゃない。不幸せなんです、なぜなら世の中のオトコどもが女の美醜しか見ようとしなないから。この子が薄幸なのはオマエらのせいだー!!!
- という怒り(という言葉が妥当かは分からないけれど)が伝わり、言いようのない落ちつかない気持ちにさせる。それが本作の読み応え。深読みしすぎなのでしょうが。1巻の最後に来てようやくタイトルの意味を明かす、作者の熟練の技を目の当たりにしながら、こんなことを思っていました。

日本経済新聞社 編集委員 / 天野 賢一

- いつのまにか加速する本編となんの関係の無いノリツッコミが好きすぎてもういい加減に倒れそうです。ばたり。ほとんど話が進んでいないのが凄い。このまま3歩進んで2歩ノリツッコミでいて欲しい!終わらないサマーデイズ!って超ホメてるのにまるで褒めていないような文脈になってしまうところに、このマンガの凄さがあるといえるのではないのでしょうか?

クリエイティブ・ディレクター・京都精華大学&神戸電子専門学校非常勤講師 / ひでつづ・NORISHIROCKS

- 三十路オーバーの僕らをくすぐるようなギャグのオンパレードに、脇腹が軽く筋肉痛になりました。東村アキコ作品の秀逸なキャラに何度となく腹筋を鍛えられてきたことか・・・漫画業界初の消費者庁が認可した特定保健用漫画に推薦されませんか!?

元レコード店コミック担当 / 阿部 大介

- 「画家とその妻と美人のモデル」が織りなすシチュエーションコメディ。こう書くと何だか三谷幸喜作品みたいですね。延々と続くテンションの高さ、人を刺したりする不謹慎なネタの出し具合など、いろんな意味で非常におかしいです。

ジュンク堂書店新宿店 コミック担当 / 小磯 洋

- ストーリーだけではなく、話の細部細部のギャグがワンパターンではない東村先生のワールドが健在。勢いがつきすぎて空回りしてしまいついていけない・・・なんてこともなく、キャラクターのインパクトに頼り過ぎないギャグは必見です。

原田まりる

マンガ大賞2011 ノミネート作品

アフタヌーン / 講談社

「SARU」 五十嵐 大介

選考員コメント・1次選考

- 伊坂幸太郎の小説『SOSの猿』とのコラボ企画という異色作だが、伊坂作品を読んでなくても楽しめる。言うなれば五十嵐版「AKIRA」。この作家がこんな風に、空母は出るわ戦車は出るわのバトルアクションを描くとは、驚きの一言。しかも堂に入っている！

中央公論新社 雑誌・書籍編集局次長 / 石田 汗太

- 「民俗学・神話学」に焦点を絞った今作品。今までの五十嵐作品に見られた牧歌的な空気はあまり感じられないかもしれないが、学問的要素がちりばめられているので読み応えがかなりあった。民俗学好きには堪らない！孫悟空に関する考察も非常に興味深い。

元書店員 (三省堂書店経済産業省売店勤務) / 畑中 瀬路奈

- 久しぶりにドキドキするマンガだった。上巻の序章が最高に面白い！絶対絶命をどう乗り切るかハラハラ感がたまらない。全二冊なのにこの世界感の創造は本当にすごい！あと、装丁がかっこいい。

アニメイト / 鈴木 寛子

- 光と闇、精神と物質、魔術と現代兵器、さまざまな二項対立が唯一無二の画力によってスパークする様が圧巻。

書評系ブログ「yama-gat site」管理人 / yama-gat

- 「遙かな昔… この世界に巨大な力を持つ存在があった… 世界のあらゆる秩序を左右する程の力… それは猿のような姿をしていた。」エジプトのトート神、斉天大聖孫悟空、そしてアンゴルモアの大王などなど、物語が広がるだけ広がっていく上巻に心配を感じなかったといえは嘘になる。けれど、その8ヶ月後に下巻発売…。そんなことは杞憂だった。他の五十嵐大介作品と同じで、この作品も読むたびにいろいろな色彩を帯びる。五十嵐大介は超自然的なものを描くのがほんとにうまい。

米子高校 司書 / 野間 勤

- ハリウッド映画の「ダヴィンチ・コード」「ハムナプトラ」あと「キングコング」なんかをごちゃまぜにして五十嵐大介氏独特の味付けを施した結果、この「SARU」が出来上がりました。って感じ。今までの著者の作品の「神秘」「幻想」といった特徴を残しつつ、新たな分野への挑戦が感じられます。

DJ/DJ RANUMA

選考員コメント・2 次選考

- 根底にあるのは善と悪の戦い。壮大なスケールのオカルト話だが、作りとしては昔のゴジラ映画を思い浮かべた。不可思議な事件が起き、人間が謎解きを始め、そして戦い。ちまちま悪魔払いをするだけがオカルトではないのだ。

八重洲ブックセンター 宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本 さとみ

- マジックの力を使って悪い奴を滅ぼす…嫌いなわけじゃないです。この展開 (笑)

元書店員 (三省堂書店経済産業省売店勤務) / 畑中 瀬路奈

- 裏付けのしっかりしたファンタジーです。民間伝承をしっかりと調べて独自の解釈加えてるから、空想でなくこの世界の物語っぽい印象を受けます。これ読んでから表紙の目が怖くてたまらなくなりました。物語のスケールも壮大で全 2 巻とは思えないぐらいの内容でした。

IT 系企業 / 廣瀬 公将

- 裏個人的にこういう「偽史」っぽい統一的世界観を元に作られている作品には弱いので、素直にやられた。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

- ストーリーが独特で、これまた良い。正直、画はイマイチなのだが、続きが気になる。

IT 系企業経営・元漫研編集長 / 平田 淳

- 深い考察の上で展開する物語。1 巻では理屈を読み込むのにせいいっぱいでしたが、後半は絵と造形だけで楽しめます。最終的には若干物語に都合のいいように話がまとまった感はありませんが、運命はそういうものだと思います。こちらもこの作家自体をオススメしたい。

フリー WEB デザイナー / 河本 知香

- 下巻後半で、ロマ族のピエラ・カリが登場して、彼女の星の楽団とともに歌い出すあたりから、読んでいる僕の心の中にグワッと大きなうねりのようなものがわき上がってくる。言葉にできない感情の奔流とも言えいいんだらうか。さすがに初読の新鮮さは失われてしまったとはいえ、今でも読み終わった後に世界が少し変わって見えるような気がする。

米子高校 司書 / 野間 勤

- 壮大！これ、すごいぞ！そう思いながら読みました。この作品からは音も、大気の動きも、感じられて、それはこのマンガの凄さだと思いました。紙のマンガからそれを感じる。また紙に印刷されたマンガだからこそ、それを感じられたのかもしれない。読み終わった後はブハァ！と息をはきました。読むのに馬力がいるけれど、これは本当にすごかった！五十嵐先生はこの作品を構築して紙の上に吐き出すなんて、とんでもない人だな、と思いました。この人も S A R U なんじゃないの？とも思いました。しかし、本当にすごかった。すごいとしか言えない。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

- もう！久しぶりにドキドキした作品！上巻がプロローグのようで恐ろしさだけがどんどん迫ってきて、本当にどうなっちゃうのかと……映画をみてる感じだった。下巻は反面、スピード感がすごかった。意外や意外。でも、そうかと納得してします。ドシッ！としたあとに すっきりと気持ちが落ち着く。特筆すべきは「装丁」！かっこよ過ぎる！額に入れて飾ろうか迷い中。

アニメイト / 鈴木 寛子

- もっと評価されていい作家さんこの作品は、新しさと、懐かしさの共存、しかし、懐かしさの部分で、いい意味で、裏切られる、そこに、新しさがあるそんな、漫画人の、興味は、短な物～人智を超えたものその意味で、大変素晴らしい作品だと思います

tetote 代表 / 力丸 真

■ とにかく話がデカいのよ！なのに全部腑に落ちてしまう猛烈なマンガ体験。

コミックナタリー編集長 / 唐木 元

■ 現実の社会で問題となっている伝統文化の消失を漫画のストーリーに盛り込んでいる事で、とてもリアルに漫画の世界に入り込んでしまった。五十嵐さんの秀悦っぷりに舌を巻きながら、バビル2世を呼んでいる時の様な感覚もあり、深く読み込んだ。非常に面白かったです。

DJ/DJ RANUMA

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2011